源氏物語評釋

[illegible]

五

萩原先生著

校正
譯注

源氏物語評釋

二帙五冊

鹿鳴草舍塾藏

第五帖

若紫 評釋

【奮注】以歌為寒名也 風ふつゝそいつしらも見んむらさ紀の様にうよひ名る時べのうらまに若紫とつゞきたる詞を見て此式部々の姓君を紫上と名づけ給るハ藤壺の女御此ゆかり尋ね出たるよよまつり云々

【新】紫を若紫てふことハうら紀根を用る物なら様ハ理ゆへしがたし 此ゆへ伊勢物語に春日野のうらむらさ紀のすり衣とよみしハ女を紫と人て若紫といふべきを此草にこゝろ人て若紫といへりと見ゆ志るまハ紫の名をそのいせ物語の詞を何人なく用ゐて若むらさ紀と名づけし此ゆへなるべし かのうへまゝ此事をうつして此事に出しにても志る紀へ

【玉】源氏君十八歳なり

【釈】若紫といふ名のすゝあとより我いたゞ形釈のごとくなるべし 然までもこれハたゞ藤壺女御のゆかり此紫上のうらに紀をいふ事なまバかの様にうよひたるといふ事をいひてなるよと称く法けしなる後しかして次のこまゝあゐ此末摘花と反對にしたるへ そのよしハ末摘花に委しくいふべし

【評】此夫の教誨いとゆへりうへ案ふ夕顔の脉ハ末摘花にうけたく続きたるを此事ハなかくふかくわらハやこの事より其出しまたるハ例の案外に出まゝぎたりしなく末摘花と若後とりうへくらやなされたるものにや 細流幾なりに夕顔にふ河原院にて霊氣にあひまひしなるにうへやみにわづらひまゝらしに演きられたるハさもあるべきさう法までも文のうへにまたさることうすうにもしらしハ物いうべくさて末摘花にまゝらしはやこにわづらひ給ひ人志まぬ物志ひのまゝ紀までも法師のいとすなりにやうにて書反まぎぬとあるハ即チ

○若むらさ紀

文庫

此書の照應ゆゑ同年の同じ比なること後はもちせらるゝ又其下に此の紫の御ゆかりなど
祿とりなひてハそのうつくしきにふんいりなひとく六條ゆかりにてよかまきまさりなふめれど
言くとあるも此書の照應ゆゑ既に紫上を二條院へむかへなひしをしらせらるゝかゝて此末
に二條院におもしらまぜバむらさきの君いともうつくしきゆゑ心まゝなるハうらなり
かしさきとありなりとゝ見ゆるよ言くとあるハ紫の上の心を推らるゝて紫と紅とを二ゝに
ゆけく反對にしらるをひとゝに結びたる所なり見ん人此様にふらく心をとゞむべしいひ
しらぬ巧なる出ざまにてらいなぞの人はしらひよしぬことゞもおはし
○北山のうちまみの院なるゆゑ僧都の僧坊をこゝにいでゝかしこに女ゝてあるを見て言くをうしげ
なるをうなごどもあらはしくわらはべなんゆゑといふとうらさして出くうしろの山へ源氏君
のゆゑりて京のうちを見ゆるより言くゆゑ頭麻呂の君をかゝぐさ伏案をあらはさまたる
事つきいひしらぜめでしこしその中に絵にいとよくも似たるゆゑ又御心いとゞうゆゑ出らせ
ゆゑんなど絵のすよりいひ起されたるを孟津に頭麻にて画をうらはゆゑしこのおこり
なりとあるごとくかの日記を名ぐさまゆゑ伏線なるべし　この脉つひに絵合ゆゑ出て
ほとろび出たるいひしらぬをしゝ又攝麻呂の子は今年義人よりかゝり始るとゆゑ
後に良清と見えたる人のすなるをこゝにハ其名をあらはさゞしてたるゆゑ後に出さまた
たる又その良清がこと成いひさし始めて後に明石上の媒とあるべき種子を結されたるなど
すべくいさらもいふべしなることなし　さて紫上をういまんなふ所に先ッ雀子をとり出て
ゆゑ其の伝ふなくおほどろにらうたきさまゆゑ雀子より尼君の後世のすゝ
ようつり後世のすゝより紫上をうしろめたくおもひなひくあ姉君のことに勝り法ひに
按察大納言の母君よりにまたりゆゑ次第いとめでたしかくて此ゆゑまみのさまをくはしく

あらはし出たるまでにさるハかゞりなりしゆゑをつくし少ゆる人にいとよう似たまるがまゆら
るゆゑりかゝりとこゝにとりたる抑揚の勢ひいとゝつよくいみじく出したりさて君子のかゝ
などよみくて尼君の打ちをれなんる所へ僧都のきておどろうしたるとぢめなど結よよろし
其次にかゝまバこのすきものどもハ言くとて狩りの面白の風空の脉を引りて来られたる
なども透間なきすぎ侍なりあけゆゑ所ハいといたりかすこてといふよりハたゞ此館波を
ひやなりて源氏君の才と思ひとのいたゞきをうたるのこれ文なりさてかゝりなひく帝へ聖
の事奏しなるゝこのひじまがるを結びたる所も葵上のすゝハ桐壺よりこゝにこの後の様も
○藤壺宮の御事はしらぬ結よめでたしかしこの所なるにもかつぐ詳せるごとく此ゆゑ上の見
出たりそこたるとなくなれば世来りて法ひに此書にいたりてまさしくあひなへることを
あらはされたるにこまより後ハ藤壺宮の悔こ思ひまゆゑよりしをのこかまたるなどいとよ
ろしさてこれを此書にしも新さまたるハ紫上のすゝ此ゆゑ出ゆゑ此ゆゑ出ゆゑ此ゆゑ出ゆゑ
したる法なるハ勿論なるまでかの法ゆゑみのゆゑりを尋ね出ゆゑ此ゆゑ出ゆゑ此ゆゑ出ゆゑ
をたしみなふことを出つゞけてゆゑりのゆゑを紫上にゆゑつゞきて結構とおもしれたりさてその
末に源氏君のおゞしゆゑしき事を見給ひくうしなふ若めしてこれをせなふ所にたへまし
たることハ桐壺君に宮藤の相人がいへりし事のやゝ委しくなりもてまたるにてやゞて
下の出たる此源氏君の盛衰の伏案をもやく定めてあらはしたる所もんをつくべし
○尼君の家をこひくたるゆゑんしなるハ紫上をもやく譲らせんの結構も其後にこの
尼君笑なるゝこと成いへるハ紫上のこゝにしまとなりたくものあらまゆゑさまをあらはし
源氏君のむかへとりなるべき事の理をおもしたるも且此尼君をさしも用ゆる人なるまで
もやくうぜなるよしにするとゞめられたるなるべしこまより紫上をむかへとりなふまでの

○若むらさき

来ハさぞでうかいてきあれ人をおゝきあまバいとむつかり〳〵泣さわぐ我ぞふさもろべく
すると〳〵れさる俗のいとそぞろ〳〵と無名犯王の乳母がかゝる〳〵んとのこゝろそさて世王を
さごろもあまあぬ人今世のさ海のそいとうるさきかゝるれどや世のさまいりくても
出して寂なりしこと無海の彩よいふる制度のさまさばふ後夕彩浮舟ちどさめ〳〵の人此
うんをおひて〳〵て粉ふべう〳〵ど無粉ゝ就王此北方のそこも後〳〵のさふやを称をおぎ
あゝふされるをゝをつゆそんるべきなり

ゆゝはやこゝ 細俗ふうよなうん
【鮮】和名抄云瘧病説文云瘧音虐俗云衣夜美一云和良波夜美寒熱並作二日一發之病也
よろづまゝあひうちうど
【孟】まゞあひ厭術加持ハ真言教陀羅尼のうゞ 訳よろづのをいふハさまぐくの呪術をつゝそせさをのひゝをのゝく
ある人小山よあん 【拾】小ふといふ 訳同注小山のあるじちを鞍馬寺といて准擬をく挙られさまど例の用あるれバ山をさらでそのあさうのうゝみこんていうゞかこれおこのひゝく 訳さまぐくの修験道を行ひて行徳ある僧を云
人〳〵まゞあひうちうひゝを
訳去年のゑも瘧病流行しする時あらん人のまゞあひうちうひゝを此行人ハ速よりがひうど勧あまさことうとうる
ちゞうつ時も 細瘧ハ志そびうゝそ、ゆ〳〵ちちあるうん

○えんむゝさに

浮氏云
ゆゝはやこゝ 瘧
ふうゞひうちうひてよろづまよ 病 煩 特
じゝあひうちうど 加
てゝおまうゞび 数 遍
小山よなんおゝ
かゝこれおこの 賢
おこあゝくゝ 行
ゝまゞあひゝゝ 厭 児 カ ネ
ちゞむるゞび 類
ける射たゝう 止 ヨヽアヒク
せさはあゝおゞ 試
よゝおいゞまあ 老 屈
まうしゝれバゞゞ 除司
ゝまゞあひうちうひゝを 室 外イヤヒナシ
ゝれバゞゞ 除司
ゝまゞあひうちうひゝを 室 外イヤヒナシ
ドウレヨウ
ゝれバゞゞ 除司
ゝまゞあひうちうひゝを 室 外イヤヒナシ
ニヤウ
訳去年のゑも瘧病流行しする時あらん人のまゞあひうちうひゝを此行人ハ速よりがひうど勧
あまさことうとうる
ちゞうつ時も 細瘧ハ志そびうゝそ、ゆ〳〵ちちあるうん

釈志ざこゝろハ縮凝（こゞる）のさまなるべし
まよひハ複（ふた）されバ病の縮（ちゞ）み凝（こゞ）く
わちゞめるさまあり
とくてそんさせぬへ 釈そゝく
彼彼（かのかの）人をめして試（こゝろ）みることなくて
老ぢ羸（つかれ）うて 釈老屈（おとろ）して窒（ふさ）がる
もえ堪（こら）えと行人（ぎやうにん）のことばうつもらう
いふバせんそ〳〵 釈さゝバいふやん
ようものびてゆんとのまふ
法（ほう）とのまふそ〳〵 釈これを得（う）るの助（たすけ）
きんぜう 冥加（みやうが）うつ入（いれ）て行（ぎやう）のまさ
やくふかく入（いる）ゑ和（やはら）ぐやう
釈行人（ぎやうにん）の居（ゐ）る所（ところ）ハ山（やま）ふかく人（ひと）ゑ
ありときまつこゝろ所（ところ）のさまをとれ
次第（しだい）入（いり）てゆくもとより文章（もんしやう）沢（たく）山（さん）あり
やうひのつごゝりあるべし
釈三月廿日（さんがつはつか）のまふあべさまの十日（とをか）れか
どをかやうよの俗（ぞく）のまふそ
みをさるくほきいくそのやまそ
玉（ぎよく）をぐていそのやまふもとのいくる
ハ山のあれ岩（いは）れ立（たち）めぐれる地（ち）へ
岩座（いはくら）とんぢるハひぢこと

とのまひて（泥近）ふもつまづ（深）
うあ〳〵てまぐ（北山）
いる所（入）なりと（三月）
京のそだざう（スエ）
まぶけうあ（モオモシロウ）
のまさぐ（タナヤウ）
あるふもあ〳〵ひまぐ（キウクツナ）
名づし（珍）うおぐされそう（イヤそのまゝ）
あそまし（勝）
まぐ。ひぐ（聖）
まれもと（令知）

盂（うはん）いるあんいそのやふすまバくそ
ひぐと 釈行徳（ぎやうとく）ある僧（ほう）をいふくそ
ぜんがさのやうのも
釈験（しるし）の方（かた）れ行法（ぎやうほう）もとのまさ法（ほう）ハ
修法（しゆほう）加持（かぢ）ぎの勤法（ごんぼう）ハりとのまを略
きてのふ俗（ぞく）ぎ旧注（きうちう）ハ沢世（たくせ）の祈禱（きとう）と
いまてるハいとしも邪（よこしま）のまとひるへ
得（ゑ）バといふ老屈（おとろ）して懐（おも）ひをふく我（わが）へ
まバうの邪（よこしま）法（ほう）ぎをてんのまをまる
るおぐバ持（ぢ）をまうといふさまあり
さるバ法（ほう）の俗（ぞく）ハ大（おほ）さ修法（しゆほう）をむとと
して阿闍梨（あじやり）おぐようる我（わが）のぜ（ドウシテ）ぎき
面目（めんもく）とこるあ〳〵とをなりこバ名聞（みやうもん）を
名（な）てもふくりこて下（くだ）ハおぐろきき
ろバくとのへるおぐさまをりのまさ
いそでうかうなもう〳〵
釈修験（しゆげん）のふバ名（な）ひみをいふぶ
しゐてゐてうんとて好（すき）も隙（ひま）ぐ
評おぐろ（大徳）ぎさてとのへるおぐ
しきを柳（やなぎ）ぐくとふる大（おほ）とこ
ゐぐりと掃（はら）う文物（もんもつ）をめぐ
さるべきおつて 細符（ふだ）なるの

まぐ。志ろ紀（源下）著（フウジク）
名〳〵作（召）りしる（編方）
まををひ法（ほう）
てうをれてを（忘）
ぢ〳〵んとおぐろきをゆぎてうもちみたく
見（タダアラウ）まる。いとこなわらざる（咲）
ぢ紀抱（ハマセ）つくすせなる。かぢ（加持）などまゐる（然）
ほぐ。田（ウチニ）まぐのくぢ（係）あぐりぬぞうもち
いでたくみるる〳〵んぐ。ふる所（金呼ビ）まてて
ぢ〳〵（僧）うぎうぐ（坊）どを。ぢ〳〵（顕露）よんゐろさ（下）ぬ。
ほ（ほ詞）まぐこのまぐらをれ志（下）ゐふおるぐ小業（折）

九

なるまじどうれちしうしわるしてきよげなる
（リツ パ ニ 浄）
屋らう（廊）れどつゞもて。おぐらちいとよしあるれ。
（タテツヾケ 木立）
なるべくのまむまゝ。（今アラン）とこひる人バ。ほともなる人。
こまるん（某）ほよがし僧都の。これふことせこゝり
（二年）
侍るだう（坊）に侍るなれ。（係詞）ゑさづうし人（今ノ住）せ
（今ト申ス）
ある所よてそのあまし。あやしうもつまりやつ
（コト）
しけるれ。（僧都ノ吾ト）きくもてすれ。などのこまふ。
（ソギ）
きよげなる（浄）ほしもなど。あすまいできて。（関伽）ある
（童）（水）
すてまつり花をりかどさるも。つゝはよみゆ。
（法供詞）
しこよ女てそのりをまし。僧都ハよとさゆう
（彼 處）
よれ（今ヲ）せ。（居）ゑれちじをいうなる人なんと。（ヒ）ぢく
（口々）

なるべし僧都（秋）あまりしへこの
僧都の名をいふべし所なる代俗れ
名をかくする抄作なるなかあるべし
いへるを同注に覚忍僧都とせられる
ハ例のしひたる准據と泥むべうしば
こゝりの作る（細）二年禁足のよし
まゝもしてこゝり（秋）禁足ハ行ぞれ
行法のなかりて年をかぎりてとぢ
こゝりることを
ゑさづうしき人（秋）かゝりて志ゆ
へる人にて此ゆそく用ゑあるさ
あまりやつしたるなか
（湖師）やつしたるとは法供ぶるもまくなく
かゝりしきさまをのこまふを
きよげなるほしハなど（細）女のほう
ハなり花のほしハなるべし
（秋）此法供のごとしそれを法供の人れ
見えくしてこゝ女てそれをれといへるを
あるまゝ花をりなど（秋）似ふ世ぞる
水を閼伽（アカ）といふ梵語（箋）時々化して
此ゝの水を併ふまゝる
僧都ハよもさゆうよハ（秋）此僧都ハ
行法のゆへあれバよも女をぶくし
おまゝしとしすゑとかして居しむる

いふ。おわてのぞくもあり。をうしげなる女ごども。
（ヲウチ）
（埴辺ヘ）（ウツクシサウ）
ほうれ人。わらはべなんみゆるといふ。君ハおこ
（女 童）（行）
なひしのひつゝ。同ゝ高くれまゝよ。いうなしんと
（法）（高）（瘧ヒ ウデテラウ）
おぼしたるを。（法供詞）どううまぎらハさせなひく。
（カレコレ）
おわりしいまぬなんよく侍ると此ゆまぞ。
（病ノ子ヲ）（イ志ゆへの山ニ入）
（係）うし後の山よりちいでゝ。京のうちを見れ
（後）
ふ。（係詞）ゑるうにかきみまゝりて。よものあぞ
（遥）（四方）
うこそうとれうそふりわられるほど。（繪）ゑよ
（ドコ トモナク アバイ）
いとよくとふるかれ。かゝるさ後ふまむ人。
（似）（住）
ゑよおりひのこまことハ。ゐらじうし。とのこ
まんば。（法供詞）こまハいとあはく侍ゆ。人の國など
（浅）（ヨソノ）

君ハおくるひし給ひて　新真言ふぐとさうけく誦しふわるべし　釈おもわしかゝとくハふろく
とゝろきさゝへハさぞおりひく　細おもゝりハらなまぎらてとあれバおこしぬるのあるゝ
峯ド入るるのそらよ
うしろの山よ　釈上よもとゝしゝちいでくとある亦のり文字の後ぱれまるるまで花亦へうりて恵のゝるを見せず
無為にてよ侍らざ谷成のかちとあるは你の物しあてゝ上ふうしろの山とうるべし矣中志ろ人の山とあるもすてぶらし
紅葉ふの色をまる　釈々ふるは木芽のかん出か成いのち何することろ前といへる法ハニヨゟし
志をよいとよりくも　玉此句よりのつゞきハ地の句れやうあるでも地の句れさ前よなしくびこれよりの源氏君の詞とも見べし
釈此段のごとし絵しかくてたまでる例くいの句の結びおしゝてたて千ゝるとうてそとの所よりの源氏君の何かるべし
例の詞のかしまそろしれをろうる法ありの四段ハかゝり亦まといやう句の源細とせられるでびくらくし
かゝる亦よすむ人　釈々やゝふろしれよさ亦ふまずおい人ハ々よあさこゝぬてとハあるまじとく
こ年ハひく亦さく給ろくし　釈法佐の人れ詞くかゆうあるやハよぐ伝ざるりの々しさまも侍ぞとのゆきを浅くとハ道
人のくふ　同矣本のるまれハいつぎるゝ　細他皇之伊勢物語ふ人の本まても物らゝるくあん中まぎるるるとのよ子同じ
いよいよ法眼いのみどゝうまさしせかのん　花ふあがしのさけハ地ぞて亦をまぎるむべらん別してハ浅君のさけをいへるのやふ　弄月
なあぶしのさけ　源氏玉母ふく志こゝ尤あひしそろてすてのい出しろらく
尉しているなる　あまさまや
よろ何よまぎるりしゝ吟也　釈上ふおもわしいるまあなんらきとあるし兮尾
ちゝれ亦ふ入ろし　釈法佐の中れ一人か何と事とあまたてるふぞふも良清か詞とも志らくるまでとある浪てもあれなる
ふゝさの山まで例の文法あり　湖師ここを須ぞ明るをろくべき張本あり
あかびらあるあよ侍る　釈此段も俗ふツンボリトシタといへまでとさのしるおの四注どもふ寛大あるんとどろきてるやうら
らへあるひとてさまよし八語殺よらくりさてある浦ハ何のはてりあるさおのぞ花ハまそるまで海の面をとんゝとしるる
くゝきとあゞしふよくハうえろくツンボリト様くはゝしある亦ぞとのあまりて　ゆへハ亦ふ法波ある海ありて海のおめて八寛大
あゝしめのを々や
かのくふれさいのゝく志だち
新発意菩薩とらぞごとし　釈前の播磨守の息女のこと　同新發ハ初て入二釈門一人の名也初發心の義也経よ
　釈新発意をつゞめてしんぼちとらうちとら新発とのまゝまてその後俗ふもシンポチとのへり

いとゝいらし　玉いゝさハさしと
あるまじきれのくらひのわかむろかりようり
ハよれさをあめてゞる何く他も亦ふ見てさ
るも法眼ふさらしも播ゞ前守の
ふ路そるか給ひてよれよかしく
大井のはるそ　湖師後ふ播磨守ふ
なるもの　河出身を子ともを立
か仕をもまじへうやるるとうく
ひらかの　玉変まあうる人をいゝしもも
すべてひとゝといへハあるまじるさの吟ふ
達ひくゝうとしてひとつしひとつし
あづるむあどくふゐそさし
をあの中の名をとすて
細中ねふくあ并ぶてふさゝまの
の変せて物ふあきなるべき成を求
をすて々あのものさまん々へい願
るふゝのまるべしされバよのひづ
あのくハいのくそく
　釈あさをあひゞるねぶくあくハ海さ山へも
きたしゆくまもるる山ぶまも世せで
いるべき成ざえるひくてはつふ出
あてはるハひろくゝるやゝられ也
いるさしぞふハふゝれ里へとく々係る
さゝる事聞ふ字を読く例の文法之
〇思むまさえ

ふ侍る海山のながめは海ちど成ば読んぞさせて
きゞくばいらは法眼いとゞうまさしせ給ひん。（上達　ドノヤウニ）
ふじの山なかばしれふけあどかゝり吟かるも（富士　嵩）
給ひ。まさに西の國れおのろたらしく。（西）
いその人をいひつゞくるもかゝりてよろづよ（浦々　磯）
やまぎはしきし吟ゆ。ちかれ兼ふハぢり海の（播磨　△御氣之）
あかし浦ふてあかふこゝふ侍まじ。何のいさゝか（明石　カクベツニ　ユキ）
ふるさと海そなるまでど。世ゞうみのおもて（トイタオモムキ　海面）
を見するしるほどもん。あやしくこを訴（アンバイ　他）
かゝぞ。あかびら兼るとて後よ侍るかのくたれ（似　ツンボリトシタ）
さいのゝく志だちのむすめかしづれさる家（前守　息女）

ゆらんのに　嵩　寛　三芳野の大川　水の（四の）四度　ぴかにあらね　まから（はの）話　らん（消数）

いといたりし。大きの後にく。出たるもして
べうりをる人の。世れひがもれにて。まじらひも
ぜぜ。手柄の中ねをすてゝ。中ねはれりをる
はうやうまでど。かのくれ人にもしてしあ
あづまくなれめいぼくにてう。又こゝやこ
にもくんといひく。かしらおろし。作りにをる
を。すこしおくまわくるゝ山ぞみもをぐ。さる
海づにいでゐる。えがくしれやうあれど。
げにうのこれうちに。さも人のこゝのゐぬ
居きゆこがくはうまるがら。ふかれさと
も人ぞれまんまぞく。わかれ。はしの思

ひまびぬべきにより。かつれんをやまする
すまひにあん作る。さいつてはかりくぐ
まて作りしついでに。かりきはれ人にかわて
もべりしかば。家にてこそどころえぬやう
なわれ。そこらもるかに。いかめしう志ゆん
にくはくまるさす。はれいへど。園のはらをく
にて志おれをる事おまバ。のちれよりはひ
ゆくしうにふ。便きこゝはがまんも。おなくし
まゝまゝり。のちれ世のはとゆんもいとよく
してあるく法師まさわ志ゆる人にあん
作りをる。とゆせバ。やこてこれむすゆんもと

〇若むらされ

滅除王の后よ　細　呉服よ入ぁと
いふようその名をもくらし
秋　此内侍のごとく入乱るゝ比ぎ
もぐせよりぐらぐ御よみのきこえぜる
よつてさて御ぐしの太うさこそ遠きのごと
くふかきもうれしき海こゝく詠まの
后とあるべきいろ兄せおゝん入乱ぐら
ゝさのぜぐーやとてくゝ笑
ふさありさて滅除王といふ名八仏
あゝよいおくとあるまで旧注涅槃羅の発
語の称八こと也ゝ
かくらふ　秋　かくらふとハあゝれ
歌舞さのむすめれをを御ゝくく
人をさーていふ
義人よりこと一ゝあゝる
拓　正月五日の叙位よ六位の義人ハ
うあゝず巡爵とて従五位下ゟ叙せ
らるゝゝあるまで旧注涅槃羅の発
語の称八こと也ゝ
かのへきこれゆおゝんやぶうつべき
秋　この御作ぎる叙位の義人ぬら表
あまさバかの八位ぶんをさきまぎるを
ゆぶりてこう御とせんのくハあゝんと
御まきくいへゝさまをみちゝいろ
よゝるとゝんぐごーこの義人ハ

（岡）ゆくしぶふぐそうハあゞぴぷるちんぐぜぎ
ゆるふり代（ワルクハ）くのくふれたちさるぐぷ（イキ）（意）
ことのーてぷさるんぐべくゝそおま（ミセル）でさゝに
（殊）うけゐぐぷ（入道ノイモ）ぶふあるをこの人をとふてあるれ（無）（用）（笹ニ）（イあれ）（ムスタ）
サへ）さまことおわぷもーわまよわくまでくぷれ（我）（後）
（異八）んぐーとぐぷよ（遂）ぜまぢぐそぐぷ（違）海よいわ移とつぷかゐぐん（コノヤウニ）（サダメタ）（遺）（シアハセ）（言）
ちおおとく待（イ待ちうど）るなどをやゆまぐぜ君もをろ
為　置　ーゆきさゝふふくくかいまうわうれき（王）（龍）
さ兄よなるべきいきむをあなゝもぷ公（齊）（女）

良清　と見てくる人のゐるをふ
公名をあゝさバして書くその線を
伏せ物もてうひらバうてふり
いでやさいかもゝく
王　をさおくろうくおさひち
んハおひくんと上へくさの
御く　秋　母上ゆおゐべきおる
うびさんとつくをそ又そてて
ゆおろべきまこをさおくよりゝく
ともめぐりて作ぐくこともをしし
かく定まぐぜめるさはおハ文
末の伝れ法をつけ味ふべ
そてそゝく　王　細流ゟ良清が行
ことあるハいで下ゆゐもゐとあれ
をえ二人がるゝいでやとよろう
づげて同人の詞ともあるべー
よゐとろうどやゝいぎぞゝく
秋　いでやとうあゝうあるべき
ゆで同人の詞ぎてくろうて
あるをゐるこゝでく義人の詞を表ハ
これうと上ハおゐびさんとおそる
ゆてむぐさこゝろうハいゐとと
いひとくさるゆびしさてあぎの兄
人をとおろうえ二人が詞あるべー

（高）ぎるさくるやとそ見ふかくいふハさろ（播）（タ）
（磨）よのみれこの義人よわぷことかぐぶう（今年）（爵）
（守）えるなろ（子）ぜかのへさ（遺）（好色）のあるごんやぶうつべきんハ（言）（破）
（得）ーぷはくぎずくこよるおんと（ソコデ）（ウカバヒヨル）
（御供人々）らんぷをれくよろさる新よおひいぞく。（牛）（タイ）
（幼）ぬるあいくさるおやよのこもぐびさんハ。（丙）（古）（バカリ）
そてゝそゆる（母）（ヨシ）
うらそなどぐぷやこのやんてるのきこ来こよう。（甲）（若人）
（童女）ぷいよふぷぷとりてよどゆく（ヨシ）（タフトキ）
（タヨリニシタガヒテ）まてくぎづひとりてよどゆく

こそてもてなすおもてぶさけなるさまにて人のあり
ゆうでさてなやそくてをごそみたるさま
じそやちどいもあり。
うみのそこそでふうらいんそまい
海底
のみそんもものむつうあごのやひて。
ヒト、ホリナラズ（ヒカシウ）
生そびおもはそまかやうおても。
ツウレイナラズ（ヒトクセカハッタ）
ものおまでぱみ（イム）ゆごまらんを
（明名ノ女三毛）耳
やとんまでかうぬれごおこそ
（痛ム）
ふんあるそこにあまでやうへ
帰
らせのひちんとある銭。大とこぱおのるま

あさけあ尼くそのくなりもうむるくもおくさやうふ
ふ他人のあさけあ尼がそくふゆくそとよやうむぞ物考ふべし
尼ハ行ふありてそく
そてあやありそくふくハ海の深ふろめハ海松あるを尼る目とい
なるべ尼よ行とそ海のそこまでふ尼ハくふくふまをあげよ
うやうそてもの
釈うやくふのこまべくものさあり
めてひごくさそのう
釈新葵上の像出自新あどのやんこふあれ
うあをいふんし
釈あべくあべびかそひくそると八一とあ
くまごろうぬまでと
釈こそより出供の羽ふお掃よどいぶ
ふびくあり」文法そて見のこ亜ふうくそをお供のくれ読年こ
いごいうをとうべきぶあり
出物のけおどくふまる
釈くそくまるよハまふ海の上
そるもタベれのそよりのそをあ〜ちてはよそのけ物あるふや
ゆべれのいさうふさふ
細おふ物べあふあるまべ
よごその西おりてま
玉うやのたべハ人の俗をふ直（ヂキ）をうふ
まさあるさなあり
技佛ぶそおゆて
ふよお仏をすおそれあさふ
尼あうそう
釈いありうふ上よ
きうげあるまべごもあさ出きて
そくめこそ女子をそれをとふる
ふをうけくもの女あるのもてくふハ
ぱ尼のつうの人ありそうとあそこふ
ハぱふまぱのあるべハ尼そとうふさ
あべそれでれ様ふべ業ぶあり

細 加持

玉 底のそふ目ときそふあをさ新

祝 幼年あどより一人こそのくそあこあひいまそうおそをとうべく

釈 式俗坊の西面ふ

などくふまるさ海よおもてまものそる銭。出今
よひそあぱおべとそ加持
夜
させふへとそ山ヲ
静
御供

君もかくるまでびゆゑとなくひまもねバ。さす
がにをとしくらく。さしぐにあらつにまとの給ふ。
日といとなげにぞ。ぞくなれだ。ゆゑぐれの
いとうかをこゝろにかぎれて。かのこしぐにぐに
のもやふかなちいでなふ。人くハかへしまひて
性えだりけともまてのぞに給へバ。たゞこの
あしおもてましと。ぢ仏をしをまりて。おこなふ
尼なりけり。をぐれすこしあげくゝにこ
てまつるめり。なりれちしらよりゐく。
くうそくのうへに種子ぞ。いとなや
ましげふよみゐる尼君。こゞんとみてぞ。

（猿 寝 シナレ 帰ラ 小柴垣 御供 僧房 西 面 違内 チキニ 藤 少 上 中 柱 倚居 脇 息 誦）

さまをしるをとる詞
おひさにみて
さにうつくしうんとみゆる
あゆにをおろげこるゆうに
やうにひろがりこるうちをたくん
ていへるなり
あくまりなして
しておをすりこるさまを
まこしおがしこるにあまバ
評 茂春と思ふと似こるをいふん
とてまづ尼君に似こるよしをいへる
いとこゝろ
まゞめのふを
ありがこなまバ菅子のやうに単立
まるこゝろなるべし
評 此泣尼君の
種性を語り出んにつきなるまでぞ
まづ菅子をとり出て種子とし
こるこゝろいとみじこまでより尼
君に似つるもし後世のこのかなりて
つひに花姫君のうへにおよぶ法のぐ
んをほけて味をなべし
いぬきが
河 上東門院の上臣に此
名あり栄花物語にみえたり此物語に

○若むしきれ

甲十にまりまていとしろくあてに。やを
こまごとけしつきぬつくりに。まみのすじど。
かしのうつくしげにうがれこるすゑも。なろ
なら姫がによりもこよなう今めりしき抱
うれとあはきにみ給ふ。きよげなる大人れ
ふたりだりけてハまらうべでいでいりあそぶ。
中に十ばかりにやあしんとこゝろて。しろきぬ
山ぶしなどのなれこるまきく。ちしつまきこは
女ご。けすこみてつるこどもにあるべくもあらに。
いみじうおひさにみてて。うつくしぎなるか
まもちなり。かしらにあふぎにひろげこるやうに。

（イだらり 貴 痩 頬 メツキ アンバイ 髪 美 キラレ ハシ カヘ ツテ 長 カクベツニ 大人 二人 童女 出入 白衣 キナラシ 今 児 似 生先 髪 扇）

八あてきあれきあてありき八公の字あり又君の字又世俗にあめれとべきあどいふ八姉君伯母君といふんとこくあせごのうちか 玉 こハ寺あれバちるといふ綴あどハなれあふかりふあきぞよい尼てる心まいのれ所れごく 湖師 若ふんなく條おあるとの心かつれるそこく折植をしくるのよくいふく武もしいれ係咲花をまて見いあの夜をとてあるしこあり 釈 此尾よくんをつけつかまるまで照應をも見へれるいとてめでくし

いとをうくうく 玉 やうくを道うあうつるとつぐくさく 湖師 鳥がぐのとつけバとらぬべてさあをといへくちちてゆく 玉 雀を尊んとてくいふひあう目のの心のふうか 釈 年のほどよりハ心のいふひあうものしのふを説さきる詞くおのがかく心かあけよ今あれるも知らぬ命あるをばみ上ハ何ともおぼさで心としる花と志ひあふよくおぼしそでハあがりてあ

ゆら〱として。かほはいとあかくすりなして
たてり。なにごとぞや。わらはべとはらだち
たまへるかとて。尼君のみあぐるに。すこしおぼえたる
ところあれば。こなめりとみたまふ。すゞめのこを
いぬきがにがしつる。ふせごのうちにこめたりつる
ものをとて。いとくちをしとおもへり。このゐたる
おとな。れいのこゝろなしの。かゝるわざ
をしてさいなまるゝこそ。いと心づきなけれ。
いづかたへかまかりぬる。いとをかしうやう
やうなりつるものを。からすなどもこそ
みつくれとてたちてゆく。かみゆるゝかに

らでこしてあの反ぶし 玉 わらハむのあらえ年のほどにハいみじくつわりいとこうくるとぞ心

明 涅槃經第四金剛身品持戒比丘比丘尼不得畜養奴婢牛羊非法之物

うちうちあうれら 河 ふあひやらあるうれらあんさし 玉 髪のけしきとよいふこしきて木の枝のさしいでたるさまを枝ざしといひ目の持をさしてあるさまをまなこざしおとのさまどいひくされたされハ類の際より頂の方へ髪の生のあうさせるさまをいふ髪ざしといふも枝のさしと同じんぞく此詞あまくに見えたり髪ざしなどいふさるハ限りなう心をつくし聞ゆる人に

細 若紫よりかさこしまでのひと

評 このいろうをもて若紫ふ似たりとくとこ藤あさハさとさり若紫と藤ぞせちめくのひする伏案ふおなをよろし味くべし陽でみつる

評 此一段にこそ由れさらひて筆のしらぬくるといふしろあとくれ 釈 此上の詞とよ

いとながくめやすき人なめり。少納言のめの
とぞ人いふめるは。この子のうしろみなる
べし。尼君いで。あなをさなや。いふかひなうもの
したまふかな。おのがかくけふあすにおぼゆる
いのちをば。なにともおぼしたらで。すゞめした
ひたまふほどよ。つみうることぞとつねにきこゆる
を。こゝろうくとて。こちやといへば。ついゐたり。
つらつきいとらうたげにて。まゆのわたりうちけ
ぶり。いはけなくかいやりたるひたひつき。
かんざしいみじううつくし。ねびゆかんさまゆか
しき人かなと。めとまりたまふ。さるはかぎりなう

おくまうくるゆゑざまよまさとん
そうそうあさあるさうとうそう
そうつもそつにおそてまうそうれ

梁 四もそうそうふふるもしも塔つさ
よみそーくるとうかさそ〳〵うじし
とうやさこもとうひうるとうあ河の
あぢろひすべてうれこと
こうよ佐うあうう 湖をおばじと生
あぢ〳〵ぢる西もヤざろてとようと
ばをよのこーやとう宝る源氏
玉鬘 ば何いづのこられやとうの
ーを係るとうる。を悟るうく
ーるとかく係くは判をを云え
右のう里へこれ

秩 源氏をのうち秩あめる例の
脈えををすてうう係あおもばえ
こをこハ秩係ち目し命を返るう
ーえをやるくいを
おをこハこのすれりのどもハ

梁 この八例のおのとい申さしすれ
うのハ西おうよるをこーくとさし
ていのうさそてこのさハ源氏をの
ーまさられる二出のふふかまおれ
ようこーれ人をとうふかまれ

若どもハ男好くしてあけられそう
あるあうさをめこすれハようる
ふ人をもれつうえとかのくれ
御後のさまを後ーあるあり
評 こまに帚木の照衰をこのまふ
うーさてはた御んをつくべし
さてもいと 国 はさてもハ俗ーの
さてものごに雅俗ハめづーれ
つうひざまそ 梁 あハ雅俗のつれ
ざまそ後はのごとれさて
かのくれ此ちうよくみうつまぬ

梁 かのくハ若家ん友つとうそ
そてちうそせうハ例の脈くかて
学家そ紫上を友垂のちうる
とあり如うる結揮いとめづし
ふうとふ後くんをつくべはく
源氏をう賢人くう帝一のはるる
なあり

ようこうそーそるよ
国 すべてようさるとふ云ハまれて
こさまんうこもやさそて後
教の枝へハえちーべふる人をいふ
あるべーこくまて又ようとふ言
ハ御後母御ぐよハをめーみまあり

〇まれりまれ

まづあんひよあのーまひる氏までいまなん 呪
きこはけ後るいみどうまのびふひさきばえ
ちり後ーでさふ後うなごっはとみひも
おうそでざわるる。この 此處 よ 左ゑ河 あれいうぢや。
よるひのふる人のはをきまおりいでは 消 せう
ようこもちまもいみどうよのうまこんこまき。
ふまべこのすれりのどもハ
梁 この八例のおのとい申さしすれ
うのハ西おうよるをこーくとさし
ていのうさそてこのさハ源氏をの
ーまさられる二出のふふかまおれ
ようこーれ人をとうふかまれ

人 あのどまへかる あり氏をのこーてよくさる 坊 行 バカリ サウ
まづれくれ二ビキ
ふちいづるざふかくらひのわられるこをを
みるよ。 丙 とをうこうおどんさてもいとうこし
うりつるちごられあよんなこんかの人のはへ
まるよおけくまのなぎさんもれだやと
思ふこうろふこうをきあうちふーはへる。
御郷のはまみこ。ほ 惟 光 氏よびいでされ。 間
おそーもやぐて中ふぷよぎも
ーまそるよ。ていまあん人まこれ。 今
拙 僧 実名ヲイフベキ處ニ

をこゝハ御しの頃なるなにいへり
うれたしく　新　こハたゞうれたし
しみてゝハあらぬぞせんうたなく公
うくしみをいふ　湖　かくまこしのげせ
まゝをうれへまいひてしたはしまひを
生を惑をしとゝ
草の法むしろ　玉　草莽といふごとく
旅の法むしろなるなにそのとハいへる
十よ日　拾　よの字あり音なる
べし下の十よ年まやなり給り
ぬらんとある後にしへべし
かうやうなる人の云く
細　効験あらば子細あるまじ紀を
万一験あらば所の威徳もいかゞと云
まふなにしのびまふとも其も源の
用さ源さゝぐひなる紀
しぐなるよりハ
釈　験ありといふ名の御人よりハ
今ゝなるこゝも　釈　余らんといふを
ふくめおしゝるゝ
すなはち僧都なりまへり
釈　源氏君の隔を紀を守て即刻
僧都源氏君のうへ入まゝまゝるゝ
こゝ當然の礼なり

このちふ御ゆ給ると八志ろしめしながら。
（王補 ゐハゞと長まり）
志れびさせまへる紀。うれたしくしひまへてなん。
草れ法むしろも。この坊ふてまうけ給べけ
まし。いとおいる紀ことゝ。中給へり。いぬる十よ日
（本意 席）（カナ）（源詞惟光給ふる）
のゞどよりゆ。わらはやゝまゝらひ給るを。こゝび
（コロ）（瘧）
かきるゆて出へがたう給まゞ。人のをしへ
（コラヘ）（教）
乃まゝに。ゆたりに出づ給入給りつまで。かう
（急）
やうなる人の。志しゆ。ゆゝふさぬ時。たしかな
（聖）（験）（フツガフ）
うれ給きも。出ぐなるよりハいとほしう
（十九）（凡）
しひまへ法みてなん。いたう志のび給り法る。
今ゝなるこゝも。とのゝまへり。すふハも僧都
（参字申ニ）（サツソク）

うるぐしき法ありさまゝ
釈　僧都ゆゝぐりく用さあるく
うつ世にもそくしきれたる人なれ
ぞあまりふかぐしくやつまゝるゝ
を源氏のたぶすへるゝ
このまゝるなどの　釈　林間の乃れ
まゝもをうらりまゝ
おなじ某のいわりなまぐ
釈　こゝもかしこも同じ草葉なまぐ
どゝ　細　涼しきとハ附ゆふ紀
らぬ御の法くすゞしげなると云
僧都のかくに源氏をゆへまんと
てのまへる詞
まぐ君ぬ人へ　玉　源氏君をまぐ
君ぬ人へ　孟　おの某法れらいまこ
の附この世よのゞしきまゝ光源氏なる
つゞでよ君なりんやおぐゝいひしを守
てたぢしひまへる
あるまゝありつるまゝもも　釈　此上と
同じ本意をもうるなり
釈　此よりおひしると同じ本意をも
さるうふ様なりて君所あるさ母に
法くりうるさゝうるなりといへるふ
んをつくぐし

○若むしろ紀

まゝりゝまへり。法ゆなまで。いと公もぐ
うしく。人がらもやんとなく。せに思はれ
まへる人なまゝバ。かるゞくし紀法ゆりさす紀。
（係 軽々）（タフトク）
たしかなうおりわけてかくこのまゝるなどの法
（フツガフニ）（僧都）（アヒダ）
ものがたるなど。ゆゝしくおひくおるゞ志ぞの
（詞）（柴）
いわりなまぐ。すしさぐし紀水のながれも
（菴）（涼）
法説ぞさせん。とをちに。ゆゝしくまへバ。のまぐ
（切 ネンゴロ）（係ん）（未）
君ぬ人へに。ことゞくしういひきらせ法るも。
（尼君ナドゝ）（僧都ノ）（イを）
法ゝおしうおぐせど。あハまゝなりつるあり
（ハヅカシウ）（紫ノ）
さゝあもいふしくゝ。おもしぬ。ぞふいとん
ことふよしゆゝて。おれゞ本意をとう志

やり水にかゞりびともし 燈籠

【釈】遣水のうへに篝火をともし。とうろにも火をともしたるといへる也。下にかへりぶなり

そらだきもの 【新】式に此香の法あり

作るなるすそを名香とす。年頭

梅檀などを名香の香といふべし

君の御おひかぜ 【胡】源の君のかをりめでたき

を八方にまでかをるよしの香の

うちゝかふをいふなり。香をとゞ

あやしきにほひともいへるを、源氏の君のかをりに

ならべていへり。さて源氏君のかをりは

名香にもまさりて、かをりたかきを

いふなり 【釈】こゝろづかひとハ、つゝしむ

心をもちて、かをるをいふなり

よのつねなる法のやう。

【細】源氏によろしきをせうそこし

すべて僧ハ俗に対してハ必世の常の

法理を演説するを礼儀とすべし

【釈】礼儀までもありあるべしとぞ

此の世なれあらりし

【孟】源のみ中

しらぬことのみど

後の事のうへを思ふなり

なしたまへり。月もなかりければ。やり水に

かゞり火ともし。とうろなどにもおなじうまゐらせたり。

南おもていときよげにしつらひ給へり。

そらだきもの心にくゝかをりいでゝ。みやうが

うの香などにほひみちたるに。君の御おひ風いと

ことなるまゝに。うちの人々もこゝろづかひすべかめり。

僧都世の常なき御物語。のちの世の事

などきこえしらせ給ふ。源氏は罪のほどおそろ

しう。あぢきなきことに心をしめて。いけ

るかぎりこれをおもひなやむべきなめり。ま

してのちの世のいみじかるべきをおぼし

【釈】孟津のごとくあるべしとおもふにも

きこゆるを、とめてよしあるを世

のつねとくに、かくハいかにも

ましきて

へくまいて後世 【玉】いけるかぎり云々の詞

かゝるすみかにも 【釈】かうやう

なるところにすまひて、世をのがれまほし

くおぼしめすものから、昼の御おもかげにこゝろ

のかゝりて、こひしくおぼす

【湖師】いかなるうへとも、このかみさぶらひ

たまふにかと、伊勢物語

侍るにや 【釈】こゝに物し給ふ

人をとひ給ふ、すゞしきをのぞみし

をさとりてのちの、このよのことを

ちかしきにいふ

【釈】源氏君のとへるをききて、僧都

のさとりたまひて、おもひてまゐらす

つげあるべきを、あてずさる

故按察大納言 【孟】尼公の夫也

上の祖父なり 【釈】大納言にて

陸奥出羽の按察使をかねたる人を

按察使とつゞめてアゼチといふ

このりしたまふ

つゞけて。かうやうなるすまひもせまほしう

おぼえ給ふものから。ひるのおもかげこゝろにかゝりて

こひしうおぼさるれば。こゝにものし給ふハたれにてか。た

づねきこえまほしきゆめを見しかなどのたまふ。そうづ

なんどのたまへバ。僧都うちゑみ

ながら。うちつけなる御ゆめがたりかな。さぞ

侍るなる。たづねさせ給ひても。御心おとりせ

させ給ひぬべし。こあぜちの大納言ハ。世

になくてひさしくなり侍りぬれバ。えし

ろしめさじ。その北のかたなむ。なにがし

がいもうとに侍る。かれハ。あぜちかくれてのちよを

我もむかて待るさので待つとづくふ事待るふ
背向 尼ニテリメリ
よわ。かくふるふもまうでもバきのものぶよ
(補遺ヒ) 来リ住 (ニテ)
こりてお待なかとおもふかの大納
うれむすんぷのの一待ふと守ふしハ(イカ)ソハてさ
ぎきくきうイ方ふあくでまめやうにやある
キラレイ 真実 (補遺ヒ) (ニテ)
なおとおくでさだ待うまうぞきぐこの
ゆめ待うしあてにのおへぐ。むすめ(補遺ヒ)こぐも
里待うぬくうせくこの十よ年うやな
亡
めうさうくんぷ大納云ハ内よなくんぷ。
禁中 本意
ものびくくらくらくひうひとと此
ふ勅海まへぐくこのせんな
ありバいうむべくぐ
かのかのうく 真実 (補遺ヒ) 方 (ニテ)
ものかのうく 真実 (補遺ヒ) 方 (ニテ)
本意
ぎきくきうイ方ふあくでまめやうにやある
キラレイ 真実 (補遺ヒ) 方 (ニテ)
なおとおくでさだ待うまうぞきぐこの
ゆめ待うしあてにのおへぐ。むすめ(補遺ヒ)こぐも
里待うぬくうせくこの十よ年うやな
亡
めうさうくんぷ大納云ハ内よなくんぷ。
禁中 本意
ものびくくらくらくひうひとと此
ふ勅海まへぐくこのせんな
ありバいうむべくぐ
かのかのうく
ダイジニソダ
を抱待くくでさだ待うまうぞきぐこの
居まひうまうぞきぐこの
(補遺ヒ) 逝 (ニテ)
ありてあつうひ待りしおぐよぷるる
ウナ

人のもるぎ
てかくひつ
(補遺ヒ) 待ツ (ニテ)
うくやんと
(補遺ヒ) タフト
おやくぷ。ぷきくふ
なう待うふ
とぷふちくふ
日 近
そのおおうう
(補遺ヒ) 人ノ
みこれ法そぢ
兵部卿
くるやと
人のおぐもお
(補遺ヒ) クラキ
しらなくうちくひてんのまくん
コブリ

おくるう待うは
(補遺ヒ) 我ヨリノ
おもひよ強ぐぬく
細 侍ル
の何ものあり法師おぐハ拙き食ふ
のくのおおおくふもてうう
釈 せよおもひまぬぐくうう
ことを眼前まてうう
さくバそのよおくう
紙 海のふ居ふれまうと世ふ云
られば縁うそうくうよおくく
つけおう
かのくまもうふ年まうや
細 無給々の法師おまバ為事と
も俗形ふくぬふようて俗よふ
まうとひうおく 秋 若うぐ兵
給々のうれ法師ぬおう
潮師 おのはむすおう
まぐく 釈 そうくうの下もう
河のくぬうちもて成くう
玉 まぐを
さおくふおまでもさうらおくて
そまも入うてよくふくのさおう
さうらバうこぐてく
頼 年くのさ小梅のぐと仰らバ

ゆくへの体言よりへ見バ十二十カ
十二ヒおど澤ーそうへろ
そでめそろくみ　釈はせまで
めなまふもまでぐこのみこのさこ
をさふうりつゆくへの
玉ゆくへ傍称のねろうれまこ
釈をさろうろうのさまとみさく
うりつこらの詞をうせバひまま
のうまくふをうし附のそをひひ
世のくをまふ小指也さぐうり
なくあり作しわぐこそて
釈はその女上れあくうりの以をう
うふ女子人うくねひーくく
作りしてあくへ寿のひーくく
そまよつけても　釈その女子の
うまつけてもおをひバ尼君のく
ようひのまよ　潮尼君の花のよ
そひのまよそひなげうくと
されバよと　風そふそのまおう
くとねげー今をうとうそふ
てハいよ〳〵泊をうーのみ
おそ尼君くおれど　風傍称へ
ーまくをうをまでもなぐあ
をうひうう詞あぐべー

川葉上あぐべーしふのをぬ
へハ俗小縁ひうとうふぐべく与ハ
名のふく添ぬねよやあんとみ
そあぐべー
作はのくおげーあぐそて
玉我をうのつきれ人のおふのや
うふおげてきぐ似つうーぬ
よろひあまバそーまあやおげき
ん赤いよのつれれ人のやふいうせ
の交けまをひてすふいうぐべ
まぐわげよ　玉まぐハいまぐ
みとろろハひうとく
女人よりそあきまてそ
玉此張ハをやの男ふてーひて
とふへみてう作べーまぐいろ
あくへ行れども女ハろーあまバ福毎
ようてーひそう待んというきて
愛はおの名ハ女人よううつくろ
まそへ人の妻ふもあう物をまバをを
すそうう法のおくのはづうべきの
ゆもあーべされバ妻ーくく得執し
ようく祖母ふのまにうてーひてを
くふまうぜんとのさてうやれくハ

まをへ　生　おそまてよ　立　ーまをうとられ。そまでバそぢめまふ
うくみもあーうたもまりくそひまへ。
のバあーうたもまりくそひまへ。
なくおうし待りしねぐまてそ待ーそまも女
すぐくぬひてんや。おめふんありて。
ゆれうづらふうも待うあぐーよふれ

まをぬまやひんぴくりずくふてのくなん。
まぐふぐふれねぐーぴたりのくなん。
らくくぞーそうきおくせぐとうる待あまバぬまぐ
うぐきおくせぐとうる待あまバぬまぐ
なれほどうやそ女そ人よめてあれ
らんぐうくてぴれふもなのうふおあまぐぐそくふ
てぴれふもなのうふおあまぐぐそくふ
えぬやすくよういくぴのおぐふめうたうくひ
得執てやすんとすくよういくぴのおぐふめうたうくひ
待めてやすんとすくよういくぴのおぐふめうたうくひ
ごそれさ待ーまバをれんよぐろ
ーまくをうをまでもなぐあ
ーくぞーえよもやそーまぐべのくぐれげ

ありをそうてやはきてすて帰宅といえんぶく〳〵法にさだまり
えーうもゆえうりん 鈔 あらいとや
うやとうのさあふもえうさ〳〵ひろ
いあさえかゞゆえのよふうそく
まるの後のこんまん
至補 頃さりけの頃さ時刻をいう
あゝゞ頃ふ初夜のつてあくとの八
さゞつうさて八次の詞と重複せり
ふらもあやうよ 鈔 膚後れゞ
御のよゞくふも
至補 よゞこころよ用あゝそれ八必
とのみを語るあるべし
鈔 夜の後ぶゝくそて八拙ほよと
こう頃のさよせられてこうこなう
法むされバいかとうみ八遵守を
出ますてこてひくものく
拙ふさみあるどその 細 引考の
あゞ後あるべし 頃 例時とそ考
をりとよむて 鈔 傍私の後頃ふ
うべしふ書れをおのうさ俗のを
めてくし
まゞふあるへも 鈔 ふあくもゞふあ
へもいえゝ仏ゞ其ゞて八拙あるべし

まりて源氏君八空つめゞ仏ゞす
なくて書ゞつれのりのよう
初夜といはゝふらも 鈔 傍私初
夜ふうてといはゝふらも書ゞ
して拙のいくく立さるまゝく
ぎゞのくうくに
頃 念隊の狐見ふあくるあり
河 松なるよゞぜのくうくふあ
さてあるうるてんみくれ
あつうう打てうめく
鈔 女房さうふゞ脇るべし
とふふさてさうる房風の声を
鈔 花君の笛赤八西ありてと上赤
あり源氏君八匂ひてふおいれバ
西北のその御れ和かてさる扉風
あるべし
あをふゝうへバ 鈔 若八人をも
ようふ扇を吟うるとれ拙後
の声もあるさんでうふの人
れもをてくく影あるべし
さてこもゞふてろく
鈔 この御さる人〳〵ふふ源氏の
居るあをとみふえんけゞか
追きてあ声や扇の初八ひゞ耳

〇えれ初まれ

珠数 脇息
されどゞ ぞのくそくにひさあくさるく
引鳴
おくわの吟 音 カスカニ
ひゝてそ
上ヒンニコ、ロニクル
そ事てゞ 外 建 ッバヶ
さてこひさ、ひのあく扇をおくく鳴
ぼるる見
まてとよやゝと 〔アルベキ〕
きゞふいづる人あゝりすてく
退 〔ヤ キ ソコナヒ〕
吟ひてゝ佛のはるべバ
案内 冥
はくく 遣
更
るのゝいとうあてるにうちいても
若 貴 出サン

のせごとなひとたどるゝ五雅
は源氏の近きをやうにいそれるハ
ほうし又此世ある人を四條にお姫
ときいあていそれるもいかゞかも
お姫をあれてハせあれ物ことに說と
もあく一人の女房とあるべし
わらけの御さるべハ 河 從冥入於冥
永不聞佛名 法華經
新 此文よりて是僧ある尼君かせ
バ所よつけてのあらん 釈 此世さ
る女房を仏のさるべよとりあしく
佛ハ冥途に入ても文に迷ふまじく
其仏の御さるべきにハさぶらすに拘
をあとひが耳とハさゞるぞといふさえ
玉 四條ハ尼君へかゝるせまるん
さるべよ云くハひがてくし
さつくさのこゝ 釈 さつ若り
世をきとへさるハさしに論あり
さてその神子の若君を見るよ
ま氣さびしの神も後よりさぬと
いふをその緣れ寄しとりあしる
なりさ人といへるに男のうへのすを
もうしさるうさまでハあらぬ
とやもあひてんや

こゝにぞうひもすぐりしをまでど。いうあるうたれ
声 ハ
きしるべまうハ。おぼつかれくと。やゆ。ぞにうち
ジ
きけなわとおわめれまりんも。ことわりなまど。
モツトモ
さつ若のわりなふれうへを見つるよりこび
神の神も寄ぞうもうぬと。やゆえ給ひてんやと
のこまふ。きしふうやうれ。きせうそこ。うけ
分
まりわるくぞれ人も拘しまりぬさ。はぞ
しぬしこわげなる。ぞれよりハ。と。やゆ也。お
然
のづからさるやうにつりて。やゆるならん。とおひ
なし給へりし。とのまへだ。いりく。やゆ。あれ
外ウセイフウナ
いまめりし。この君や。よづいるなどにおれ

ぜるとぞおぼしむ。さるまてハかのこゝ
ソレニシテハ
を。いりできひのへることぞ。とさまじあやし
ドウシテ 聞 イロ〳〵フシギ
きふんまぐれて。久しうなまじ。なさけ
ナ
とく。
尼君
まつゆふこよひだうわのなさ給みこ
のこけよつゝ。ぞ。ぞ。こゝ給るもの
を。と。やえ給ふ。かうやうれ人だてなるにをうそ
添詞 イクヤウ
乾 難
おれ。まごさしに。やしぞ。ならぬことにな
習
ん。ぞこじけなくとも。かるついでに。まめく
オソレオホク
しうやゆさすべれ事なん。とやゆしこまへまじ。
実々
尼君いりでえぞときて給へるなんといとを
ドウシテ

〇若むしされ

ぜうこんちやくしやう　尼君のさまれ
とのさまへでいかやうにめしつかはるゝとも神の
ぼつとうとあるふびんさうでそばきり
ゆ。尼君何イカサン
ものめやうにめしつかはるゝとも神の
よりうへうり。源何ソッジ
ぎれぬほどさつのでおざどんよふさもおがん
佛
ばうけハねのづくとそつぐなく
ちいでおぢやるふたまもなく。児君何ナルホド
ケモナイ
はくまでのやうにせやさすまも。あ
ヲリフシ
はくハいぐとの。源何
息と侍ニ
おいれようけのうるはさる
児ノ
ぜうこんちやくしやう　尼君のさまれ
とのさまへでいかやうにめしつかはるゝとも神の
ぼつとうとあるふびんさうでそばきり
ゆ。尼君何イカサン
ものめやうにめしつかはるゝとも神の
よりうへうり。源何ソッジ
ぎれぬほどさつのでおざどんよふさもおがん
佛
ばうけハねのづくとそつぐなく
ちいでおぢやるふたまもなく。児君何ナルホド
ケモナイ
はくまでのやうにせやさすまも。あ
ヲリフシ
はくハいぐとの。源何
息と侍ニ
おいれようけのうるはさる
児ノ

おくおくへ　王尼君のさまれ
そだつてげおくへつまれて源氏君
のおやうにもそばとみおもうそいん出
まうあそ
あをくハいぐ　顯尼君のさまれ時
のはらでおくへおくまでのおもて
おやくまおもはやまもなく文
ばかりあるせとそ　歌下の句
の乳おぐ〻ふる腕の袖ちぎり
同　湖尼君のさまれ母すま
もやくそおまへ　湖尼君のさまれ母すま
ハほと同ごさいおるぐ
おくそうもおさそてあん
歌かをそうもおくそおぐ〻さうを
そうあのつぐぞおぐされハまをも味
らぐ井戸ちとし源氏ふるんそ
よみさうべ〻とあまでおもんうち
岩ぬるめるまで係りちを示
てまよ出ぢまうとのおふあ
ふ格とうでや事ありること
〇えむむうる

さまをも。かのもそだつてんちやくしやう　源氏君
成いてんやいくの　某五
まぢうぐべさ　桐壺ノ更衣ニ
だ。ぢやうそうさ　紫
うさね待ち。ぐ　紫
ひよなさせ活へといとやまなまきをかん。
類　イヒタヅラ
をもおかがごそてあんおぼされんこそ活を
ヒそぐうぐ　尼君何
うまもつそうそ　イヒタヅラ
うまめひがあ　ソコナヒ
しうあん。あ　尼君ノ自身ノ

新釈 のどにあかゝりしも終ふべし
さてさうくといへるハわくより出
縁語 あかきよせあかう法句の詞
つゞけたるかの子ほんの趣意をさへ
うるふきいふべし新釈むつかしき
いはれよりほかひがことなく僧都のうさ
あたらしハ初句より
あけもくやうかし 釈 春の
らうさいとめでたし 四つ季さまざまの
詩あそび引きされども作て用なし
作者の心よりの詩ならずしもかれぬに
もあきぬまでとさきてとうられ
あてふる事ねばいろづくとも
まぎれもさぬ 釈 ことに八源氏
君のおほまへにハまぎれもそてすびぬを
あくがれまにとり ゆくゆくせうすや
うごかれいえせねど 湖師 されば老
ぐ手ずりて家の外おもまうでぬと
いひしなるべし
ごしん 河 護身 湖師 加持するなり
まもれひがめる
国 ひがめるハよのつねさかりの人の
あらくハらもあらゞよしく調子のかれ
ふるくいかあはれなくし

ましきもまぎれそてぬ。ひじり(聖)うごき(動)もえ
せ給ど。どうりして ごしん(護身)のかしせのかられ
ろうこ名のいといさうすれぞがあるも。おんまふ
ぐうづき(功)て だらに(陀羅尼)よみてわ。法まん(迎)のくて
まのかそておこり(瘧)のつるよろこび。内(禁中)より
をも法ちひあり。僧都をせふかんてぬさ使のせ
くだ物(菓)おほくまで 谷の底までほかりいそく
いとるみ 僧都 今年(ことし)ばかりのちかひ(誓)ふかう
侍らくれ おくりおもえまかり侍るまじ なす。
おさふも とひの人らる 庭にかどみめしなひそ
御酒 おほみきまゐり 山水(源)よんとまゐり侍り

新 衛門ゆく居ぬまがあそのすれて
ひがめる
ぐうづきて 細 ぐうハ功 功のつもれる也
をまんてぬさまの
釈 里まではえわらぬよしく
くだもの 玉補 ちとくおもふぐさ
ゆくあるハ昔今せの現世の元者
よりあまのゆくさよりしこまのの
詞をとえてもきるべし
谷のそこまで 評 此句まて僧
都のいとたう奔走しけるさま
をあらはしたるめでたし
こしぶかう
とゝし三年僧山の人とどとさり 細 ことしばかりにこもりせ
ゆくふか
なれるいろまゝにおもふおまちな 国 此度かく対面し
ゆくへハかくふるおもかゝるべし
と帰りいそげれひがごとく
いまこのおれ 釈 この今ハ俗に
オツツケといふ詞 つらひがまへく
ゆく人よそく 釈 この山桜のさかりを
ゆりて大宮人にづげて風にちらぬさ
れぬさやうきてみるべしとなり
てからずもふてんとりさきへ風より

ぬまで内(オソレ)よりおぼつかながらせ給へるも。かしこ
ければなん。いまこの花のをりすぐ(過)さずま
ゐりこん(今参り来む)。
宮人(源)にゆきてかたらん山桜風よりさ
きてもみるべく。とのたまふ御もてなし(フルマヒ)
こゑ(声)づかひさへめもあやなるに。
うどんげ(優曇華)(イゲ)の花(マデ)まちえたる(ミルモカゲハユイヤウナ)こゝちして
みやまざくらにめこそうつらね。ときこえ(源)
給へば。ときありてひとたびひらく(開)なるは。かた
かなるものを(難)とのたまふ。ひじり(聖)まちつゝ(度)
おさまりて。(サカヅキ)

（聖）おくやまの
松とびて後までふかみどり
の松のほかげみるれどうちあけてん
ひとまもなし
僧都 聖徳太子イおぼつく
の枝もたわわにこごしてまつぶさに
すわぐ金剛子イもて百済装束
藥
よつみさ
玉
聖徳太子の百済国より金剛子の数珠
を送れるをいふ
讀捧
つるなり
聖
ちひさきまごまでほのぼのとおぼえ
童

さればこそ
うぐひすの 河 案優曇華、
金輪王出世瑞也故号二霊瑞花一、人
寿八万歳時節金輪王統二四州一、
共時海水半減するがよりて此花
出現する也是をえ源氏を待え
さるふよのえうるえ 頭 例ありて
一てびに咲くあるも法華の
久遠時一現のごと 潮 下る際
降るさまをいふもめうるはこ
うりうるといふなり 頭 華（花）
ぐるまにおさまらぬ光をちん
さめて源氏をぐんげ法華経を
ちる心地とうる歌こみぎうへ
こふるうるふをえよく
例ありて てびに 国 金光明経讃
仏品に希有希有 有仏の出（二）世如優
曇華時一現（二）耳 この文をそのごと
おくものえ 釈 おくやまにさく
る松の葉を希にあけてもぎとれ
その松をうるといひてもぎとれ
ゆえにぐんげをふくめて源氏そ
よくうるえうるえをうるといふ俗俗
ぶりう 頭 松をむかうのとおもま

うでびとおまえ、の葉をまれ
あけてえ仏答 うるえをうるえ
いふのえのうつて なえうるもうる
おぼえもうつる。こうえ
うちうるて 潮 流俗おくべし
どこにおるえまひく
玉 おるとよくいひてんべし 見ひて
ハて俗俗のそれをえてるようのえ
うる幸元興寺の流あてびせ有え
頭 独鈷ハ菩提心の表え 潮 独
鈷ハ八人の帝位をうばえまわり
あえのみをよくみもなえ
さえとく大子のえ
花 百済国より金剛子のうるう
ハ元亨寺資財帳第九云菩多
迦子金剛子此生百済国所献也云々
仍一聖徳太子の法数のうハいぎ
見出仍一ぎさもありぬべくより
きえのをバうるぐふいおえそ
考のえ 扶 一本おぐえくよう
とおくもようべしいえる天二の補
地落二うる法るえとうるえいをま
てもさぐ儲がえ地のうまふ
いえるのえとえてあらべし

らんゞ色のむぐ
餘 義楚六帖宝玉珍奇の部金銀のあひだに金剛子を載せるをこれバ金の堅固なる物とおもへるゆへに金剛樹といへる物あることをおもへるなり 釈 金剛子の珠数をもちてゐるといへる之
かしこめくるを 釈 かしこめくと我
ほかにてめでたきこゝろもちてあかるゝにもち
これをいかに何へ下ころに用ひ
せわたるふくろは 拾 透きる紫紅
またかくて結ぶる紫紅とも 玉 透きる
紫紅と根もとゝいへるなどし
らんすゝりのつゞ 釈 紺色なる瑠璃の壺くさくてゆ薬師仏のるりをいされるは桜に奇べきるなくて用ゐたるもつゞくことゝ言ひ紺瑠璃の壺に薬を入るゝかたの薬瑠璃の手にあててあるなりとおもひつきてあるなれバあるべし
ほそつけゐる 釈 ほそくなりてつけゐるふくをを送るなすのすな
独鈷念珠菜ハ瘧病のためぬ紙袋
保ハそのうちの出でてと之にるを用ゐられる仏光の法様なり

かすみわたるそでまでつゆにぬれくし。
尼君 まくらもとや花のかげはさびしきとなす
むかしのこゝろをとりかへしとりある手の
いとおしてなる我がすてらいまへの法車に
なる程おかいつくよりかいづくともなく
むかへのにぞるとてはむかへの人く。
君ぶちおどこのまつまかりぬへり阿弥陀
中将ぞつぬ君ぶちもおもひめしてかゝり
やうれしくもはづりまゐりゐんと之ひ給
ふるとおきまうおくりをおくへるく
うらみやていとみじかの花のかげぞなし

とうふつるりしうらんまとバ
評 此句ハ誹諧に送ちあまさおもむき疑し
出ちるよ 釈 此句は上の句とをりしれ
わかとぞかかるはいとひぞくとし
さらんと同じさまに 新 さかひる
こゝろと係るも同じさまなるかの
ゆきのぐあいしらく 細 尼君の古へのひ
あらわしとりかへしひるをわかのあらし
まなく 釈 下句は雲をとむらへ
やあらそを流のこゝろよりひらけ
さらゆふちよきをふみそへさるハ
わかちんと
まつこのやうて 新 おもてハ作の
うへまてかすめわのあらしまつ
宰の手まをとかつてめでしら年
へろ隠に見合せんとひつたか
ゆかぶしあれバ今宵の道を見
てとみてさし 釈 初句はこれた
へ係るさ年すめるとみなのはら
すめのやまとにふたる花
のゆ能れぐとし捨きて下句とをき
われこゝの花とみ見ゆんと之と
いつるハをとし
はむき人の人く 評 此句は作に

もやけしはびちぢらくわ給らん。ハおきぬそ（鉋）ぞ
かゝるおのふ。花がくまのらけれうへにあみ（昔 上 並 居）
てふそゝしけよかるおちくるみのさすたなど。（坏）
ゆゑある池のほとり。殿中ねぶと给ふ（懐中）
（ヨヒ）まつるふえとかおもく。吹さすのしきり。秋（笛）
の君殿をらねう打ちかへしで。どよられ寺（左中弁）
われしおもや。とうるふへよりハてなる君（ナニトナウ 鳴 豊浦）
ちかるを。源氏の君いとうるはしきやうて。（西）
（ニ）花よりわがみ人るハちまとひあくせぐしゐ
（倚居）はるまよまで。（イテ）何のあもめでつるはじりなる。
まへのひちぶれふくすゐんざいの（篳篥 篳 身 笙）ぬえ（笛）

○まちむかしまれ

玉補 とかくもおもひすゝめらるゝより まづそこの詞あり小櫛あや まりなり

釈 小櫛説のごとくならばあまりなる めでたきよりしてあるべきことなれど おのづからいふべく葵上のおもはん るを源氏のうへにおもひて 御心ばへ ぐしさるべく補遺説のごとくにかと もおもふ所にあるより源氏君の御 ときべきやうにて文のふるき所あり てそのおもむきの御心のうちに侍る あまりなるやうにてもさへべくて くれぐれとかくても おのおのすゝめよ としてなほざりならざる脱文など あるべきやなき考ふべし 詳なるは のせずもあるべしと略し

よのつねあるけしきにて

釈 よのつねの女のやうにはあらで くちをしきこと [illegible]

くいぐさ 釈 瘧病のこと

よそぬハつくさ

拾 六條御息所もつれ彼ハなほ目で かの御もとにてぬへるはおもて見ゆる 同御心ふかきおもひさきねと見えし

思へバやゝもうちもすめ。心うちの御心 をもけむしよりうらひありてかりそめのおもひ へまでなそあさましきあしめ。世には心もとけず。 うとくたづねなかのふかおかりて年のほど おそくしてんとなをとぞもおきらまといかに くるしく思ひけむ。などかくハよのつねのなる けしきをも見んとや。世にハつらひ給ひし をものとのたまひせつるまぬなるそめづらし うしぬまるれど。なかめしうとけすゑのふ。 かろくしてよとぬハつらかぬのやあらんと たりめよかんとみせまくるまゝにとちづらけ

後目

よそぬそつくさかたのおもひてあるさる

河 けつすれ枝とひしよるなる君 あれどいぬハつくかおもひてうける

釈 捨まじき心をかの君の詞なるべし ましてハ

弄 細 まずれくとて まくのおひかる詞のうへかかる よくうつみのほどごとく

釈 安からぬ詞種なりおもひしくて 上のさいぬハつくとのふけるかの句を さやかなハけれなれバいかんか考 なべしこのまうせていてそとてもぬ ハつくかをどまれくかうよひくる 人のやうなのかハあさましのほ るるかとりやすさまや旧注のごとく まずハぞうかしけれかし

よそぬなどいひきて

釈 さよぬなどいひてとハなしうく そよなるまてそいへべきそと見れ 本居などの分際よのかべきこと ま大将しそとのさなるべし らうまゆるなど

釈 こゝに源 氏君のこゝろくまのびあるきうま こゝろをも葵上を試んと見ゆる さかもかのうへおもひなるべし

○よそむ[illegible]

よそけだかううつくしきかたちなり。 まれまれそあさましかたちとやそこぬなど いかきてこのふけまでてはなれんとくもの おもひなれて侍れ。よのとかのおもひみはれは めてなうをおしおもわりおなるもとりすもや。 とどかなうずまへになるゝうゆれなど。 いとおもわしうとむおかなうけりよや ものちかふにとてよるのおもひに入りぬ。 女君ハふとしもいつまれぬとのるもうひゑひて。 うちなかくぬしのみへるも。おほふかきき なさまやあらん。源ふかげなめてれして。

ようやいのちぐよ

【鎌】捨遣をホ君一よも人ちぐんうすてちぐこそもちんいのちぐふ
あゞばりのうちもこそもちぐこそ
友々業離別うみ人ちゞそえをえ
らぬ今こゝろこそ命あゞばられや
ヨすうくやとうぬと

【訳】右の古今の万葉歌中も
若しくは古今ふたし四位
の川分ハひとことうこと物語よ
いつるぐしてそこのそやよゝや
今ぐふあゞばおやうふうくゝやと
とうぬとうおこそをつひゝやひ
まくうおをとんんといふそこ

あとも

【訳】あとハ形容の辞

かのとうとのの

【訳】かくうひてぼと

きうむうハ例の文法

いひとうぐこと

【訳】似氣のきこそをくるぐことをとうあれぐもひ
てハいひとうぐこと

無始てのそゝハこゝ

【訳】あてよ

あまあくハ上ふそをおやうふうえ
あおひやうふハ花やうよて先
らゝきこ四段ハまぐこゝハきこと

いそでかのひとぐふ

【王補】年のまゝそうふ梯小路へ
うんとあつおをようとそうきこうう
ハいぐで

【訳】かの一挟と笈曳の
一挟とのかゝまゝかいせくうけこと
ひとつまきいぐこゝとく無始つ式
の由足守抄ようふ事二笈曳と
無始こと同ど庭の後ふまれよ
そこゝうふうまゞハさそぼとの笈
曳よ仰のふあんとのそこ
ゆうのいとむつまぐこと

【万】ゆうと八笈曳の由縁女こそ八
ふまぐそのゆうむつまぐこと笈曳の縁よゆうまで何
いそでうと

【訳】いそでうとう
んのそこうう仰うこうれ
ようそうこうまこうう

【訳】庇ぎんぼうとのふをぶあんすう
うてゆでうれこうう
ゆひのうるさ海そも

【王】四段ふふゝゝそおんぼうとのふ
ふうくうをふあれとのふと
いうゝさぐうこゝをんのやふ
のうかやくやんがうとうふきを

○そもそもん

とうやうせ底おもかゝみぞくまいほう。
トヤカクヤ
かのわうそれおひいでんほどの牧ゆゝき
をぶあげ氣あいちぐゝゝしもぐとうぞし。
似氣 生出 ウチ ヤハリ 尼君たゞ モットモ
いひようぐこと。
ドウシテ 迎取 バウコレラヘテ
きぐんやそくむくとうておそこまのふ
ヒヒン 艶旗 イヨ〳〵ん
ようんもみん無始のふそいとあて
ドウシテ 似 イヨ〳〵ん
きまでぶまほひやうたなどを
ヤヤカ 后腹 アラン
いふでかのひとぐそうふおぐえそうひ
むひとうまちいぐうふもバすや。あど
呼縁
ゆうとむつまゝきたいうでうと
翌
ぬうふをぶよこのひはおこちぬ
イヨ

へう。倭おもはのそうゝふべゝ。おは
うへうはおてそのまゝ出をもしはそゝきれ。
改の伺
ハヅカシサ 竟
ぬまくまいとひのふるさはをもそあう 題
そうゝまいて待ぐべなうまをふんぶぐう
オコリオホク モヒモフル
ゆうあるあくもおゝふべゝぬんぶゝのなどを。
ヒヽホリナラヌ
はゝよゝぐとぐぶいうれゝうなどいう。
イカホドカ 思ニ侍ン
ゆまちひさくひさゝむすびく。
結
のうぐうハ男をもそあのまぐべむぶこう心
トメオキテカハリシ イヨ〳〵 テ
うゝ流めそうなんとのうぶあぐハさる
カ、リ イヨ〳〵 テ
キニカ イヨ〳〵 ナニトナウ
そぐいふそうぶうゝふをふんのまゝ
包 花本ヲ 全ク
もも。

はぎすすきなどのうちなびきたるはめどもまがへやすくもあやしくもあるかな
（尾君ノ）
このまへうみゆ」あふうさもちいでやいでわぎもこがおくてのはつをばとおがみつゝもやひのくまなれをぬさとたむけつゝ
（好）
なほざりもあらじとおもふをいかにせんうつゝにゆめにさねんうることなくあらんまで
（等 雨 トハセ）
あふさかをこえてぞきつるあふみのやかゞみのもりのかゞみにもあらぬわれをいかにかもせん
（尾君ノ）
あふさかをこえてぞきつるあふみのやかゞみのもりのかゞみにもあらぬわれをいかにかもせん
（難 波 津）
ざめまでにぞひあくなんさても。
（尾君ノ）
のしめをのへ社ちかくなれをぬさにたむけつゝ
（成）
小ゆめさるほどのさとうのやいとぐるまのとゞろきにおどろかされ
（ヒトシホ）
ぬるとあやしきまでにぞ。傳都のはるかなるおもかげさへ
（金葉雨ノ）
ありありてあふまでぞもちをゝくてごこ三日ありて惟光を

ゆくその（釈）ふるさとハなのでふえようすみたてのすゐてのすゐ水ゆくとゆくをとゞめ須臾ひぐらしおりー
まぶかるゝつゝをぶか（河）生垣を生の人ゝをいまぶかるゝかなしからもあるやさまよあれど古う庵ふ源氏物語ぎもふの名をまあらん人のなげめゐーるゝといふゝうゝいろはのぢう小一字づゝたていまぶ出家をぶふゝをそびとゝふゝそて四まおそのゝあちぎゝふんんまいーさとゝふゝ
さてもさてもとお入りけてえるべー（釈）出家のぶしさてもハちうおんへうる河極ゝ
あーしゝく（剛斯）浮のみよ我のまの風もうーうあゝくまの後うけておしふくとおり上ふハそのさうれすゝーの後ふをとむるハちうのさといひくてハ浮の世それをさまるのよゝとうけのふハ常ふゝ山の梢ふくもの梢れちぬま

ぞゝそまつ人あぶ（源有）ー。（今ノ云）浮ぶゆゝくいうかゝへぶのゝひもゝく（知）ー。ぱもかゝらぬくまのれぱろうれ。さバうまかねどもれーほどをぱおりひやゝもまかあーねぶ（アレホドタレカ）ゝぱふうは又ある後。後ゝもをゝー。ゝぱ（如此）ゝまよ。（浮之）お納をよせうて（アンナ）仁かりこゆゝもかりぬ（アリガタガリ）てなひゝもりーのゝまよさ海。おぱゝぱゝのはあるまおぶるぶ。ことぞ言
おかゝる人ゝまくぱゝぱぶ（ニッコラシウ）ういひづくまでぶいとゝ（幼少）ありあれぱおぶをいうよおとゝ（源ノ）

よろぼとゆくん（ケシカラズ）ぞうんとおもう 釈 此詞を按ずるに尼君僧都などの弄花を御覧ぜんとて御車を引入れさせ給ふ程のうへをのぞきみるやうに活せられるなり下に「まて次第」といふ詞も用ゐられたるやといとぐうーつめてう

玉 さやうのそうあれはおまへハいとせうとをうせなんうハいとくうーうめてうとくいとくどハ法民なるものみ尼君のまへ僧都もうーうめてうくあんとうをうけていろうお納てのめてくいうへあべー

評 上のうへのみの事よりお納てのめてくいうへあべーとのたまふ詞のうへとうそさて爰をおしはかる詞なるべし

玉 さやうのそうあれはおまへハいとせうとをうせなんうハいとくうーうめてうとくいとくどハ法民なるものみ尼君のまへ僧都もうーうめてうくあんとうをうけていろうお納てのめてくいうへあべー

評 上のうへのみの事よりお納てのめてくいうへあべーとのたまふ詞のうへとうそさて爰をおしはかる詞なるべし

釈 いづれのくもくまてもほんの（イヒ）ちれんのかるをとてくるありてくまハ

よろぼとゆくん（ケシカラズ）ぞうんとおもう 釈 此詞を按ずるに尼君僧都（ナドヒ）弄花を御覧ぜんとて御車を引入れさせ給ふ程のうへをのぞきみるやうに活せられるなり下に「まて次第」といふ詞も用ゐられたるやといとぐうーつめてう

玉 さやうのそうあれはおまへハいとせうとをうせなんうハいとくうーうめてうとくいとくどハ法民なるものみ尼君のまへ僧都もうーうめてうくあんとうをうけていろうお納てのめてくいうへあべー

評 上のうへのみの事よりお納てのめてくいうへあべーとのたまふ詞のうへとうそさて爰をおしはかる詞なるべし

釈 いづれのくもくまてもほんの（イヒ）ちれんのかるをとてくるありてくまハ

限まてうくまてうる事をうよ

玉補 此下ふとうじ（ケシ）たるべし

くうーうくおりゐのさまもあさよ

玉補 さてくハおりゐへハつぐ（ケシ）ぞ下のうへかくへ

ゐてうるうぐさ 河 故書さ（ケシ）ぶいふぐーくはぐ（ケシ）てうぶてうぐ一字づうきうるあり

まこのかあるくハ 湖 おもも中ゐちひさくまはぐ（ケシ）てうるぼうのかあさうこ

河 おさうふぐさくもう山の井れ

洛 万葉十六ゐ下句おさうれのうへ古今序

玉 さ（ケシ）れのおまらぐをぐうこのるおようてうさう山をとう御（ケシ）ゐう

玉 古今序の詞をとひようせうるも

釈 山の井の水とひけること

洛 おのぐーぐ一盃沖のけぐ（ケシ）を酒とてよむ（ケシ）ぐーけぐるハかりてるるとうまひうー

なうおあくぐ
来ありて（御里）まぐでおくう（ほん）帝のおぐつれ
ありうんふ
んもあくぐ（ウカ）
でまそぐ（ハヒ）
づくおぐ
をあうきまふ（命婦）
ゆうあくぐ（ムリヤリニ）
おぐーぬで
うもをおぐーいづるぶ（サヘ）

くくそのてさく 河くや〳〵ぐくくそめてくるまさくるあさくるまでへ神のくめくしの井おれ六帖二 釈 和二句ハ引
なの河をわひくきしくへいくるあり下句ハ小督のでしうげんぜいをしのぶくさくあるなハ語まてるも
国下句なお流くるをいへ神のくめくくくそをそ
を皐下〳〵くるそくふ流くるあそべ
こまでくつも 花惟光くろもあそてたくへいまでもあるのよ 釈 尼君の夫あぢきの古納言のあるよ
あつのあよ 花 三月四日の事あるたし一 幸 こまのあへまうでまうす
ばくぐくくあめくくくて 釈 ばくぐくくへおくそひのある附うくくてものく
見つあくくをとふくくてそ日をくくてくそ
主令婦 孟 女主の女おくの女つべくて命婦くあるくをかくうべし旧注よ王氏乃
令婦くはせくれるハいで宮腹よ王氏とう氏ハあるくくしさそくみくるさそこの主令婦も
この附事はあるぐちせくくとうくをとくくるらむてくとあくりくる事ぐうひ俗のつくめぐくし
せあめあろ氏ふ 釈 日くるまバあるぐちの王命婦よさべさ沙汰りめよとせめうおさせん八今俗サイフクと
いうぐこ同ぐさそあるをとうくふつさまくふくくせめうおさせん八今俗サイフクと
いぐくこそろくん 拾 日本紀ホ 惠計 測 方便こまてくはるくさそろくこと同ぐ
見なるおぐさへろく 評 この二句いとめでくそくそ現くおぐろ氏さ女の事うあぐこびーさとらひく源氏
えのくをを許ぐくるさとてこのおれまぎ玉のうあぐこびーさとらひく源氏
おさくくふ神めくをまるる事をいくら既よ安ーあり院よ安ーあり院のことくくて若事の梅のくさゆふうき
なきまさろいくもくく上くの事うさとうふべしくくそとうまくいる氏さを脈とくとうふくさとう氏同よ見てうう
家もあさまくくろ)をそくく 花 そよりさいふ
評 なちの氏伝のぐとーぶりひうてすぐ氏のうをいくぐ法くのまでも妻きていくもくせちよおらるよゆくうんをうくべー
のうをいくぐ法くのまでも妻きていくもくせちよおらるよゆくうんをうくべー
あのをなるぐぐふ 釈 ろうなうぐぐふあバせあていろひる格あもあーんをとといとせちある妻ぐまく
ばちうさへぐ

くくぶの山よ 四 ぶくくんくそ
妻をそふふあるべーー方今集
秋妻の月氏ひうしあるるまそ
くくぶの山しこうぬべくおう
国 男根ぬた事よいぜせことを
ぐくの山よ妻氏ーてみうた友
の妻をもうくくしばうのきと
おおり
あやゆあるうぐう和そ
国 あやうくハ俗ふいぐうくく
とうおきこ 万 外国の氏ふまそ
神のぐう姫妻のおぐうまやん
ゆくくあり 釈 をあうハあう
あうてしとのさそ
こそもまうこそ 国 あハ妻の源の
法くをよハあくれといひあくと
いくてこのこんてもとうまふ
つれくいうふく 玉補 えあ和
あまれあるとをの今ふをの神あう
と二うまうける詞く 釈 下句ハ
そひをれちまうまれく
むあくあくまりとのさくも
ぐかハ新妻をの辞
をぜうりふさく 釈 初二句ハ引歌

どひあるを。佐てぶふやくるんとぬのうつ
おぼ(ガ サウシテデセ ヤメ)
きなるまにいとうくぺみぢ紀佐そ
(メイワクナール)
さわとて(サウシテデセ ヤメ)うちとけぢぺふううらうげそ。
なる法(ふみ)ぬをなだ(ふみ)(ドウセアユガンダ)(モノ、分ニ)(カハユラシング)(分ニ)
まるそざわるんとつらうさんぞわぼをそ。
仰本をとは佐てのるんぺ。ぬの心
よなぐうもとくまりまでぺおやふ(イダソ)
くあるみぢおくぽうまりぺ。(ルキ原)
んてまるまをまあよまをまる妻のちふ(九十カ)

やがてまぎるゝ身ともがれ。とむせりつゝ
ゐふさ海も。はせがにいみじくまぎ。
（咽嗚）
（若つゞ）せがらわよ人やつゝ人ん世ごひなくうれ
身をさめぬ身なよなしても。おもわしみぶれる
さ海も。いとことわりよかたじきなし。命ぬの君
（モツトモ）（アリガタイ）（モツタイナイ）
ぞ。はかわしかどハかれあつめもてきこる。殿
（直衣）（掻集）
ふわたしく。なきねよふしくしゐひつ。はゝ文
（ナキネイリ）（臥暮）
おども。まいの法論じいまぬよしのゝあれバ。
（イツモ）
はゝ。ものまおがしもつらう。いゝごうおがし
（ツレナウ）
（惱）
はまてく。うちへをまゐしで。二三日こもり
（禁中）
おもされだ。まさいうなるゝ。とはんうごかせ
（ヘテラ）（動）

（若ふ）
ゐふべうかめるも。おそろしうのゝおがゝなふ。
（怖）
（藤栄）
ゐも。おいとんうれ身なりそまとおぼし
（ツライ）
なぐくよ。おやましさをまさりなひてごく
（悩）
（ヘテラ）
くまりなふべきはつらひしきれど。おもわしも
（頻）
（参内）
まらぐ。まくとにはんちまいのやうにを
（実）
おもしまゐらぬハ。いられるよう。と人しまだ
（ヘテラ）
おがしくとも。ありそまバ。ふうく。いうふんん
（ドウデアラウ）
とのゝおがしこゞ海。あつれなどハいとゞお
（暑）
きもなりなれど。三月よなりなんバ。いと
（著）
しるれなどまて。人ゝ見なりとゞむるふ。あさ
（クフヰ）（宿世）（名）（キモ）
ましきはすぐせのなどんうし。人ハおもひ
（ノツブレタ）（他人）

湖月師説ハひぐことゝ
おやましきもまきり　眠　うきも
て海にあひのくるをふくきこと
よおがしおぐくうしはおやしもお
もりなり　釈　おやしきふのまて
まりてあふをりなるなまきり
なひてとハいへり
人ゝまいおなしとも　細　懷姓
のなし　湖　悪疽あどのんぐんまや
釈　月形などのなるべし
三月ふなりなんべきゝ
花　三月をこゝ月とうけるなも
あり若菫女はこゞもなくなり
ひとゝ三月ぞうりふかなるゝ三四
月の法はいちにづゝひて法さとふ
ましくる時源氏君をづきより
なひしより法懷姓なるく和月の
比よりハ六月ハ三月ぞうりふなる
さるなどふこゝ月とうけるなもハ
ちがはぬしかくてあくる年の二月
十四日ふ冷泉院ハ生まれなふ十二月
にあたまるなや
法すぐせ　釈　例の前世の名称
この月まで　湖師　事へ十上なる

ぬをとりきあやまちもこ
とごとくにんひとりよりハ
のほまさを懐姪しのみゝあり
ゆゑのことぐ比喪を着給ぐて
王 舜と令妹と二人ゝて令婦ハ
王令妹ごとうとくふかき
さぶらひさて私のごまごとうの
くるといふ令婦一人うちふくさる
左ふ令妹ハと二ごびをいとう
伯氏ごのあるハ喪ハもべ
令婦のことわれうまあるかく
なていくるあり
うちふハゆのくけのまぎれまて
訳 伯母の喪れさうのて伯姪
の事とみふいろ〳〵死るてもう
まこがごうゆしなふ美ぜうりとこと
とうけるくいとをもたまふ死事ごとう
いとぐあるまてよ
注 弟のふいとく友づらふゆうひ
まさうあり
さまざまくあるを友をとよりも
死 こゝ人ハ伯氏のやの方れ中抜ふ
ゆよりぞ死ありてゆ伯父ごつ也話

ぺきさまのふ美ふあをもうゝ
さてあらむもうけぬとうう
訳 あそもる老〳〵人ゝ白の特ゝ
そのこゝさうのもあろ死う
万れ一ぢの院占美の詞めをてよ
丙 伯氏ゆ美を相き手れバゆま三
人あるべし一人ハ天ま一人ハ后又
ハ太子れあるべきようをうゝあも
その中〳〵ぶゆめありて
朝 その美をあいせでられバ上を
おうてその死ありるぐ死ぶの
やきうゝんをうのしうの海華の
うつろひのうも脱月校のあ
あゝてゆ天のごゝめもあるべ
むいあぐらみハ彩記者のさて
訳 死をふた選のうそうあ死
やうふ泊をゝれうハ己て
しまぜあみべさうとゆ匹く
左遷のうをきゝうゝゆれる
をや 浮 伯氏の白ふ伯氏老生
海の禍福れ伏事をそゝれう
ことの相妻ぢの相人の福と同じ
きゆゝよゝろやゝ事くあうう
まのをふ処てよくゆりみべー

〇ろかゝきこ

もさのこゝろひそうぴてごおそれようぎう（イヨク 憐）
おうゆべさまくぱつゝひるごひまをおもおんもぴ（ギャウ サン ニ 操 異）
そゝれそろうゆをおもおんもぴ（ギャウ サン ニ 操 異）
仲君の源氏 者 召
芳係んまひくぴおそるものをみて
とゝせ死へだぴおうびあうぴおがりとけあ
すぢのゆをゝ合をそうぴ（ユキチガヒ）
あゆくぱ慎 自 身
いつぴぴづゝくおがくみづうし比
ゆめよハいゝ人のはことをとるまう。
この美あゆぐぴま人よまねぶぴて
合 カタルナ

のくまひくぺのもちよへいうるものあん。
とおぐりーやうるぷこのうれお半きまひ
くぺりーさるやうのやとおぐりーあそをのうよ。
いそぐーくいみごたことのそ後たうーやそ
そうれはうのうれは悩のそよ
ひてかーやかのう会とう於のいつさうやうごひ今をそのふ
ふ今一ひきんのうそいつぐーくうのそを酒　うつむくつくうくう
眠今時もやおそんーくうる夜
毒もひよくーはぐーこうるも
訳家よ今時もそうよとあるぷがーの時びさうるうぬらちんかくん
詞脱さうこをうべきうるーとあるーはくとやるんさそて
下文へのつきおーゆよるべし
七月おうてぐ　眠夜亜を両
細悩妊四ケ月うべー

あてうに　細悩妊のさるく
ぶうるものおく　玉ぐぶくん
幸のほそひらぐうおさもぐよ
こうこうのく　刀天まだ心安
毒よのくおそうまだとも
ああそびもやうりー
花せもやうく深くるほれど
よのびうこきうきみ
風ほのそひあるさるおべ
訳そうくのてよ詞なさるべ
今ぱりぐひう補りそのものを
つぬそうれ考べー
さんぐあるうぐもを　訳さいい
ふりのくあそれあるほ氏里の住
うんをひつげのべー
出ひよそう　訳尼をやをを
いぐーえうてうのお
おぐーさまおめ
風いとけ
あんたうのくえよのあるく
あくーふまさう　花漏出る集
八れんん今うとそんことそよそ
あくーまさうおそひれれ
今事友つりのほくす
秋のまつく　画おふ七月よ

やせのくるもぐぶるものおくめでに。
まこのあけこれごるこたのこおそまま
ーて。悩ぐ深氏の名もぐいよそうまつを
まそ。深氏の名もぐいよそうまつを
たくぐ法記を重ねどさぼふつうまつを
そのふ(深)みごうたくこのぐさのびげきき
ふりのくあそれあるほ氏里の住
うんをひつげのべー
出ひよそう　訳尼をやをを
いぐーえうてうのお
おぐーさまおめ
風いとけ
あんたうのくえよのあるく
あくーふまさう　花漏出る集
八れんん今うとそんことそよそ
あくーまさうおそひれれ
今事友つりのほくす
秋のまつく　画おふ七月よ

もぶとりなるうちに。この月は。ありしよ
まさるおもひよ。こと事なくくしてぞゆく。
秋のしるつゝ。いとものんびそくて。おぞれ
まふ。月のさかしに秋。志のびたるとて後よ。
からうじてしひたちなへるを。時ぬめい
てうちそゝぐ。おもしる前は六条京極に
ふりかく。うちよりなまじ。しとしかどこか
きこうちしるに。あまてゝる家の木ぐち
いとものふりく。こぐらうゝしたるなり。まい
のはともふきぬ惟光なん。こあぜちの
大納言の家に侍り。ひとりおれこよりふ

（モツトモ）（異）（ナニトナク）（ヤウ〳〵ノ フデ）（雨ガ）（ヘシ）（禁中）（程遠）（荒）（ナニトナク フルビラ 木間）（故按察使）（コトノビンギ）

とぶらひく侍りしかば。かのあまうへいふう
よりまひまひれぞ。なふ事もおぼしぞと
あんやて侍りし。とゆまきば。あはれのことや。
とぬらふべかりけるを。なぞらさなんとも
おもぎわし。いりてせうそこせよとのるへば。
人いまてくあないきさに。まざとかうこち
よりおへることゝいきをつまじ。いりてかく
はとぶらひよあんおもしましたるといふ。
おどろきていとかうらいたる事なる。この
日はむげよいとまのりしげなくなりせ給ひ
よりまじ。はんめんなどもあるまじ。といへ

（訪）（尼上）（弱）（係何）（小納言ナドガ）（日）（サウ ヂヤ）（ヅウサ）（入）（アンナイ）（源ノ）（惟光ノ使）（内人々之）（杉キノ ドクナ）（尼君ハ）（對面）

○若むらさん

ぐふうこゝろハ　弄　原もおゝひ
ものねさおゝよおわそそ
ゆめふそひあへさちあゝら
丙　原もつゝよはなあくうたと
ゆがゝめぜゝもいひちのおゝで
いまゞをさおひたそてはゐへもお
々ま〳〵ハつゝゆうさよゆのづゝ
花そのおかゝせのふをもゝちし
めさねとゝ
みゞうゞちハゐつもおくさゝ
孟遠位のうをを用ようれそのゆえ
そゝし　釈　みゞうんちのおやゝ〳〵
さハつゝかおゝ歩のうおゐれ
バそいともくも位れ能後のさあま
あてかゝおくさふゝひあへふそ
づゝ勢あゝてゑよそゝ人をぬ
ことゝと先安統を耐しのめ
ゐうおれようそひもゞき位て
細　いとける紀心年歳もうさあり
てとおう
うすまへさせのへ　丙　原のそひへ
の私かあゝめへとゝ
祖ゞひ住るたのうゞ　細　後ずの
さそうともおるべきとゝ

ども（源乙）かへゝしゝちんハうゝこゝてゝとて甫のひ
さゝしひきたゝろひくいまをるいとむつし（女房詞）
ゞよ待るめまでゞ（イ待まで）（ムサクロ）
ゆうおうう（オモヒガツニナクナルホド）おゝうれおそゝ（オ）（レイ）（デモ）ゐんとやゆ。
げふうるるほそきいよさゞひくわゞさる。
つゆよそひへちおゞうゝかひちのきさゐよ（紫ノ一）
のこめてあさせゐふたゝまれ待うてゐん。（ハヂラハレ）
なやませ（病悩）ふるゆをもゝかくともうけ位
ちゝゞわるおゝつうるさゐゞやふ。
ゐ（男（源乙）女房詞）みゞうゞちいつゝんあくのこ待（イる）うゞだ（命）
ものさ海よあう待ていとかあゞけあく（アリガタカ）
（終）

いうちゝゞまバ
細　祖ゐをあ位るまバうくふ
あそをも原のゆをあくそゝゞく
ゆてとうあそよゝきゝゐべ〳〵
はそゞふ　釈　世よゝうゝう
かこゆうをもゆそゐべきゞと
の年あ〳〵バうゐゝかんとのさ
あうかこうハれをいふとふを
あゐうあさうゝひあへゝんまを
釈　原氏もの祖しひとうゝとよ
旧注ハひゞことゝあさくゝやす
あ〳〵バかゝをそゐ紀くよすき
すきゝ紀さゐを見てゐんや
とうあさゝ
いうあゝちゞさうわうゝ〳〵
釈　ちゞさうハ位のお孫くいろるお
せのおゐ孫ようあ〳〵んとあいう
あり生ゝそひゆゐもあおゝら
あや〳〵とくまでの下ゝ〳〵祖是
ぬゝちん　玉　け世のゝ〳〵ゐる
ふおあ〳〵しおの世よりの図孫ふ
そとゝ見祝ふ世のゐとゝ中原
ハらみゞきひうことゝ
かひおゐさゝちものゝ

生もちよゝ〳〵ゝせまつゝたゝにゝぐゝちゝゆんさせぬ（ムウシアグヌ）
ことゝのゝまゐ（分ナ）
みもおゞがゝ
ゐうおれよゝ（歟）ちひすゞだ待うくゝゐゞゞゞ（過）（必）（数）
まへさを待ゐゐ（置）ゝゝゐん祖ゝひ待るゐのほゞゞふゝひ待へ
おくるん（後生）（羈絆）
らまぬべぎゝゝゐるゞゆんゐゐゐ（近）（ニアラ）ゝと（絶）（々）
ゐぼそげゐる法あゝ生そゞゆんていと
（尼君）
うゞをゐる紀をぎゝよも待るうれゞゞふ（紫）
かゝこまゐ七ゆんのひつゞ紀などおゝは
うゞとゐゆふ。あそれまきゝ紀ひくなゝ（汙）
（ムウレシカラズシテ）

釈 よおりてもうひあさんちのこ
もるをこぜめてはし上のあるをぞふげ
んとのさまかく
ようげ御かりたまへぬさまかふ
国 尼君のいたくよろこびたまへること
おびえとも何ともおぼろし いまだねよ
しめさるゝ
きこゆるをうしも 釈 うらづら
ちりたる人よばし上ハ稀にして尼の人
をとらひあうすをりしも何心なく
ばし上のこなたへ出来るふくもし
さるにさまのをいとよくうつしむ
らまてうう今もをうちあそぶ
うへてて 釈 ばし上の尼上を呼うけ
まふ何へ又とらう詞のその女の
我とばしをるがごとし又しもそるびて
いふ詞上ハあらまで
この寺ゆありし 釈 かの小山より
寺ふおりしといふ そのへのさき
いさゝう 釈 いさの詞
譯注のごとし尼君のこの源氏の
をつくんちのあいさもあくき
うつとのあひしるをばし上の娘
おぼしをうてゝうこれるはすゞう

いまさら思ひ給へんことゝ気がゝりそれぐく
しき浅をみえ奉りしんぱいなるちぢらかう。
見なりそむけよりおりれは思ひ出るも。
あやしきまでこの世ならぬおもしろき待ら
ぬなどのことやひくかゝるたぐちのそこし
待る様ぞれいちけなう御もおふれにひかる。
いうでんとのあへだいでやよろしげおぼろし
えぬさすにおやとのごとりいりてなんぞ
ばかるをみしもかるゝよりかゝるたちして。
うへてそこのちるふおありし源氏の君てそれ
ちゝしふまゝなどけん給ひぬとのきこゑまゝを。

とおひく今源氏君の事の人る
をきゝもんとてもちや来てのさ
まゆきまゝ幼き人のさまをとを
よくうつされしが
人ゝのいうゝと思ひされバ
細 源の御さゝ 世上とハ都の人を
人くゝうげよ思ひくるさまをみ
しやるふ春ふゆのぬさぬみし給ふ
ぐふいかうひるの
帳 尼君のおさまあやしくまつと
ふいさけなれこさうかがらよく
をうへさゝてこうたりしこ
まいのちひさうて 釈 いつまの
ごらくばし上への御みハふさく
いまゝのか
いそけなれ
一すかをばする人をとびるかせに 釈 上句ハばし上なれ
ておのめうしるゝ秋ハ源氏君
うづらのことへあり
国 おしまふあづむひハとひあやむ
をさゝへうえふかぬハ浅ぐれ
みてゐひなやむてそのはうぎ
るよしくえふにえぞあへさゝり
えるかぬの旧詞ども ことぶりて

人くいとかなしういゝしと思ひくあかしほど
ばむいゝさればかんぞのいゝしさあぐさまにた。
とのゝひしうばぞうしとかしうた寺さへ
うかうとおわりしくの給ふいとをりしとき
給へども人ゝれくるしと思ひされバげねゆう
まくまあやしおる様とぶりいを明へおた
給ひてかへりまひぬべふいかうひあの宮
ちいやさわうもいとようをしへてんと
おもおんまる日もいとまんやうよ小ぶ
らひげのまふまいのちひさく。
いちけなるきづのひとゑきゝしより

みかし人まやと　拾 法度入の声
ちけ小松さりおそと時ぐ人まで
あんと思ひし是ハ沼むり古今
堀江こぐたなゝし小舟こぎかへり
おなじ人にやこひわたりなん
やがてゆきあふと
釈 此ハみやこそのまゝ山里の手
あいにふたかしの人といふて
とそせのへるハ云く
文の詞元ハ四ハゆゑし也のゝかもとこ　細 少納言が
勘 この法は病て死んだるなどにハ
山寺へうつして行ひて詰る事
せしかのごとに権記故日記にも
みへ左京大夫出るもおやの喪
よ山ちかこりりさるそういけるも
さる類とえ出家しこる人ハ林
小さとせるまや
このせあらしでも　釈 この世なと
らでものちのせようゆさんとそ
ぶふいとあそまで
んのいとまなくのこ
おくのことよき切く、みずる　釈 いとま
人の法おさうふとつゞけてよむべし
おなしこゝろ人とハ若きの法方

あしまにあづむ船ぞこゝろかゝるね。かの人かや。
ところさらをさかくれたなりしのへもい。
みじうをうけおれバ。やがて法まなれと
人く少ゆ。お前てぞやのしるどちせなく
ちぞふたもすゞしげあるさ面すて。山
でゝよまりわたるほどふく。うつとりせ
給へるかしたまりハ。この世あとでもやそ
させん。とあらいとのもまことれば秋の
もの色ハよしてんのいとまなくのこ。おだし
みぞゆく人の法のうりよんをうけておれ
がちなるゆかりも出づれまゐりさんも。

あうそれふんのいとまなくと云ひ
くけのふよりしく
釈 あながちなるゆかりも
あながちなるとハ初きこと書ゑ
がちふ蒔ねよる二三ゝゆゑの蒔
つゞのゆかりれはゆるをよせたり
きこえん宮かたと　細 おひさまん
あのりもさしぬまのぞなおくりそ
おぞきてん宮かたとよみし附
ののかどと思ひ出のかく
えんおこりやせんと　細 源物きは
ひめふ花ふ自然ちくえんバこゝろ
アゝやせんとまでおおぼえ
釈 さはがふあやしといへるいとめ
でゝし
まふつらて　河 此宮ハ世の名也
元始へこゝ根るよりひろるとハ若
壺紫のゆかりといふ古今ゆかりの
一本ゆゑにむさしのゝ草ハみながら
あはれとぞ見るといふ哥のふ心也と云
細 そうちがめみにさべきよれんとそく
秋 須江入道小ハ宮の附ぞ即ちみ海あ
まいきづくぐとも用ぬのまゝ
此宮の下よ詞をそぶそいとめでし

まさかのふあるだし。きこえん宮あたりとお
やしもなべおかし出までくならしくもおる
えんおこりやさんとさはがふあやし。
まふに法らそいふしるものんむつされ
神ようひるる雅べのもらま二十月よ朱
雀院の行幸行るべし。まひ人なとやんごと
あた家の子ども。上達部殿上人どもなども。
そのろふ法ぎしえハ。ふえらせのよれ
でみつうちたちのかちぢめてさかくの
法んどもあしひのふ尓。いとまあし。山ざとへ
まとひきしうおくつまあむさがわかるまと。

おもひいでぬうそへつゝそうそれば。
僧都のうへ
廿日あまりのころみこにをすもちぬる月の
(御フミヲ)　(ミの内)
(世間)　(スギ)
ありてをそんのぞうけ(道理)(竟)なれどうちびと
(空)
(釈)この行幸のさま描
写をもちてそのいとゝあはれもまさりこれはおほやけざまに引
ぜくこうつゞける聡慧の法
あり程をこゝろもちゐべし
やんごとなき(尼君ノキニカ、リサウ)かたのことでも
(岡)筆人(イ)は摂家大臣家以下の子
どもの、出仕するされバ源氏門中
おのづからひの
そのうへ (湖)琵琶の方まで
とりぐのざえ (釈)ざえハオセ
音楽の芸術をきゝ琴笛のう
ちの芸をあまねくおぼえ
ものの下ぶせ所作ことごとく
当バ今補ひつゞけてはぬこと
いとまあるのみにこの源氏あり

(紫)
とこ(桐壺更衣)ろやせ(トモセネド)
しらひもどゝ
らひまつり。おぼ
おどやかそこ(忌)

ちうあんうち下へのことゝうた
しうあり
山里人もなくう (玉)いとまゆ
とりそうつゞきて源氏君も年
あとなりひろまいとまおくて
いかさをあるあるまゝり (釈)よま
ひの歌のさま考あなり山里人は
あはれをさしあるべし
うちわる月 (紫)こちハ月日のう
ちとなくつゝてるうをいふ
せうんの (岡)世間のさま〳〵侍ふ似
合うる例
あれよ (釈)うそをそゝ切ぐし
こひやそうんと (玉)どりちく
のかよことありどに一年ある
故といふともあるもりてれど
どいふことハ必あてハうあるぬ
ふしうとハ必あやもうんとこ度
死ぬとをそうぐひふえをろ
ゝまあんん (釈)以説ふようて今假
ふこりを補ふろんとうもも
必ふるべき御扱の例う
さうもり事よ (細)桐壺のみ部ふそ
ふまでのひ時のみまでひのみ

(イふど)
なんとんぢまん(分ヘ込)
ある歌おもし
取のんぞくふ
ろーうんとう
おゝ御そ
えうをぐくる(縫ヲ付)
ぞうよめて(お掛ケ)
のいとなるけ(紫ヲ)
しふいとむ(向ニ乳児)
もぐうんのおもむけ(ヤキウゲスン)をもんうのそ
ぞ中ふる(ドチラヘモツカヌ)(レカクト)(羊ノホドシ)(兵部卿ノ御モタヤ)

なりれ。あかつきしき人にそやまじこまれ
中 輕 慢 交
ちんなどさだのひぬるも。よとりにおぼし
過 尼君 常住 フダン
なぐさつるもしるきまおぼく侍るふ。かく
著 多 源
かゝぐけなれなぐのほとれたハ。後のほん
アリガタキ チヨウトノ アリゲニナイ
とらどりゆへさせぶいとうましうおもひ
サグリ 公必
のへらまぬ屋きをりふしは侍わなりぐら。
ジセツ
すこしとなぎらひなるきまにもおしのハ
准
ぞ。ほ年よりもとりびくなりひのへまぞ。
幼 習
いとうてしらいてく侍り。とゆゆ。おほうかう
シヤウ シニ イる 源同
くりうへしゆへしてしるんのなどは。ほくみ
カクシ
繰 返
ぬんナルベシ
ぬふん。そのいふりひなきほのきほの。あた

○卅七

しるきてのおぼく 釈 繼母のれ
もおけりまて尼君の歌きのひも
つらじくとゆるすなのさ
なげのほとのさハ 釈 無氣と
ハなげにもなれとのきこさかくらこ
じけなくのかふハあらげにもなれ
主詞なぐら後ふほんのかくるとか
ちぬをもとらびまづいとうまし
ゝきおふしさなあまでさ上
の源氏君のほめふなりのふべき
さまふもなりぬ年よりもをき
なくおふされバきのどくといふ
さてなずらひとハ御妻に准ぬと
いふんの体言なり
なまうかくらへしこく
釈 此ふをとりて案ふほくこれ
ふんとあるハほくこれぬんと返を
写しなぐめさるなるべしこれハなり
くりうへしゆへしてしるんのなどく
いふまでハ源氏のこぐらのうへを
ののふるふほくこのぬんとてを
お納てがつもるとなれりされバ
必しるしふてて一年にハ後ぬん
とあるうやちりしさてこまて

まふゆりしうおぼえ給ふ③と。ちぐりことに
宿縁殊
なんんなぐらしひしまくる。なかん人ぞく
傳
ぬらでぎこそしてせぬや。
イヒ
源 あしとられうしにみるめハかくともこハ
コレハ
きちなぐらうへるなとうハ。ぬぎすしりしむ
シン グワイ ナラン
とののへぞ。ぐふてそいとりしてそまてそ。
お納云詞 ナルホド オソレオホイ
お納て よる波のんのしらでとりの海にもなび
うんなどぞうれる。わかるれことゆゆれ
ムリナル
ほまの。なまてるよ。すこしつゝゆるされのふ。
モノナレ
なぞこそぐらん。とうちずじ給へるを。
イひ 誦
よしてとりさくへおりへり。君ハうへをこひ
深 若 女房タチ 紫 尼上 恋

あびのはしのもとをいでふそそ
くろくろ人しらぬまもくろのかみを
ばらつくしんとのごまをするこうて
んぬるふしぬどもなびくこと
もうこうおがしまのあも　釈こゝを
源氏ぐるーのまおほ君ばかりぞ。も
とゞくべきこと著々もてゆく備ひつ
あるさうのそ〳〵　釈ぜんぜん対面
いまだ〳〵こゝもおぼつかふそうに
はべるふうぞべさうにいとのあさま
あふぐふてゝてうこゝろをれいとへ
るこゝろの浦ゐぜの旅きをよよ
そへ海松ばくさの図をそそるくせ
その陣の絞捨てのどう別所ひつ
王　結ひつくべき波ういとのべきを
をうる浦ういとうるいもうこひつ
よう波のそう　釈よりうる源氏
君のはゝをもおぼつかてあびき
もさうひおるそんいうにそうもおも
ぞやというおさをゐその浦れ波ゐ
ようぜそいろう王藻ハ海藻ふれき
実のいろをうおと先生いうにた
あびてんうにそうは雲の跡やそ
よおうれ波松をうげるしゐうの

やしまひくぜ泣郎あそうふはあそびぐるた
どものなれ直衣きるくのねするぜ六父君おの
ちゝまんもんまあのとやゆきあ起出ばおさいでゐひて。
河おゆそよなほきうつんハいづゝ。そのゝ
おそもるうとそよわねちさるぜいと寄
らうこと源行ゐよハひうねどまるおもりそも
カハユラルこなつ放ぐかわ此方へうんとさひぶゆありて。おゝ
づゝ乳母ういひくそうもとよばぶてめのそふさゝ
河倚添ようてゝいざうねふとのこまんば。
サアモウ
今さうもあどものびゐんこのひぶちゐん
カクレ

浦ハあゐの浦をうげてはをを
ふあゐろハ匂ひ泊着てて
ゐのいゆうぐゝ
ゐろあれてゝ　王　ゐろべきうハとのごまふハうあれ
ことゝとゝゐろあう
浪ゝゆうれのふ　釈おべて雅を
兎をおどいへぜてゝぐゝゆあれ
ゝぐそのうひのゝ行ぐのゐかつて
今俗某ゐノカリあびのよういひ
はゝをあひをあいうゝをふお納
ゐてう抱あれるをうて兎をゝそ
あびてゝゐぐゝん　河人をゐびれ
男ハのゐびゐも声をくおびゝえ
ぐゝんあ山坂の実　鮭後撰集巻三
伊声部氏神匂人をれ松四句あび
ゝえぐゝれとゝ　釈ゝえべゝれ
を越ぐゝんとて川ゐうい松のゐき
兎ぐゝんとあるかいてゐろふし河
ハハおかいそゐはゝゐろべしまて
ゐの三二ををへるハおゐうハをゐと
いふゐも越ぐゝんとゝいをうし
ゝふあそびぐゝれぐも
風はのお遊びのゝぐゝどもし

うへよ波上
とのゐへだ乳母
ぬはびどまも
なふぶもも
さゞり折探
ハ法やくしべく
波びりて寄サキ
ゐひやうまゝるゝアテ
あゝぬ人のかくちづに近へるおそろ
うそ祢河ネヨウ
いうまふよつゝて。ゐ。ゝへ。ゐうハまろ強ワタシ

おりかしてもあつべくも 湖 さる他
人とらひ殺さべくもあるものと
まうしかしこと 釈 よふはあふ
ありて物そこそよおぢらひしく
なほこバよつぶしろしくといふを
ひがんをつくべし
いぎう 新 いぎ 幸 ありて物うしハ
新の訓ありけりこの物のうしハ 湖
物うしなよ 釈 眼痛(めいつう)のさて眼の
あかきさてこの又幼児のさあ
をもつけるごと
さまこバして 細 古俗ぞよいふべ
かくいふひる死ぬさまある物を
と乳母のうしを
まをさしられてさうろうへまバ
細 上よさおをうひとうのあるべ
ちまあらひへるをいまて整をき
ぐりふあるべー
いとうさうろうひやしく
秋 此物伝のころの女ハ整をされ
てあらてまバ伝物うも先整の
めでうしをあるうとく上ふ
ぜ上の整兵ことをくびくいふ
ー称うんをつくしうひやうとハ

ぞ云ふ屋尼人(おうとみのうひてそのおうよ。
全 莫 暗
めのこいでであるおうてやくくうも作る
乳母 ヤアアレアンニリナ
うしやしもくまをのおとん。ほくふ仏のもうし
イヒ
も作ごおをととくうげよふひられバ。
源河 メイワクサウニ
さわともかくうはおどをいうぐバにんなん。なか
牛ノホドン ヤハリ
出ぐよふ
セケルニハ十イ
まこのこまふ。あれあうのまてくずごた
源河 叢 降 荒
うしでかうへぞれよころ
ドウシテ
秋 此物伝のころの女ハ整をされ
てあうてまバ伝物うも先整の
めでうしをあるうとく上ふ
ぜ上の整兵ことをくびくいふ
ー称うんをつくしうひやうとハ

○北九

きぬの中うてうせ物ふふいうり
すぐうへく 玉 ううそうく歩こ
物てみよふあーぐーぐ在あぐふ
あぐまようて入やうのこあるる
べー体ありまうすぐうもはーこと
衣をめぐすぐうこんもおんん
ぐんあう 釈 所の万代作ようり
母源のうこんをぐうへのあるべー
今ハまうぐそうぐきへ
湖 尾君あくありうひて在今ハ
源氏そぼをうへくあうぐてな
うとみまうひてこと
雪もうーせうあーう 湖 云ふへ
づてあーぐではあーをどのと
のひーをうひてこんぐーはをさ
るひ有源のはてまみうひもあー
しこと
さうともかるはかりを 湖師 源の
はうちて平理ぐさ公をまぼとも
あーをーまうはまく 評 人をくあまをうをに作来
とのぬくまて作ー 訳 云直野のまくとうてて
小何作ぜんとのさこ

をぴとのねぐ 我 直宿
されよう。とこ
おうたいぐきて
ままもとこなれく 紫 尼
しかめ
ニ
やへさるぐぐ
さうぴ。ぴうぐ
とかあるぐ
ぴとぐぐ
おがぐしく
けんもぴうと

居 乳母 キ
ムツタイウナ アラカニシウ
ねだうちなだたつみ
戦 慄 紫
ぬいとおそろーのいふん
ソメンクアトニ サウ カハユラシク
ヒョンナゲニ

うたひぎそ　釈一年ぶりそ補ひつ
るろえハ　河男女ともおもふ
男ハ年ごろさ変さ
ぬをぶつらも　横低ほぼと上
のちぶつたとあるハひだとく注民
男の古肌つきこさ〜でハおぢ
るをとのごとくやへぐ〜
ひとへだうをおりみて
洞世ふひとくをきをそろふらに
ふせのつて　釈おりみそれ
ばさこそひとへだうおりそな
つみて肌ふとへふあるべ
いざうえよ　湖ほの二重尾へ浜
なんとおもはあふ雪ふある
おへばおもあまことさとひのめ
梁鈴とひいまとの御
んなつべきするを　湖ほのか
かるあべきての妹のこうめて
さばふふく　評小児の様あげるど
釈ひとよ肌あばあまふ
甘あ〜里のあぐり
ぐふろうおくせざ〜あ〜ぺ
評肌と雲とのひろ釈の様を女
房ともれをばひみろ　修補

ようちかつ　係河
ひとひくいざのへよ（サアオイデヨオモシロイ）
絵などおりく
ふばくべき　著
なつれを
おばばでばさ
みぐつだあ　（イヤガッテ）（ムシヤクシャト）
よぐ　（女房共ガ）（キ）
ぼろ〜ふ　（源ノ）
おちまさ　（ヨカラ〜シ）サ、ヤキ
のとうべ　（ツカハシサニ）
風さそ　（キヅ）（芒ハ花）近
吹やろふ。
生おも。

まんまろ
同ぐ〜ハろ〜ぬなぐよ
釈ほの年れおをある程あ〜ハ
とさやく〜女房ぶのいのべき
詞つきぐふもろべ
あのとハ評乳母のをひとる風
風ろ〜吹やみ〜ろふ
評風ぉ〜止て出ろふとある年の
ろべ今も社歌くぐべ〜
事あぐあろや
風よのつれまあ〜めぬとと
今ふまして　釈かくとひてのろ
そもろて
ぬくまあぐある海ふ
潮海の程作ろうふ二重尾へさ
いうぐ抱おぢ〜ふぐろろ
釈注をこふろうとあまでくる。
の浜ろるれバ今ハ一年ふろうつけ
ぬとあをやうでいる後ハひが
ことばのかくそのこ花あそ
いうぐ抱おぢ〜ふぐろべきとふ
ぶしてくるハおてきハおるさの
氏由浮ヲれるろて　洞十月旬
以尾者の中後ろうそ時なやや

○おもひ〜さ記

まとひあぐ
たあうさ海を（紫ノ）
かつれ〜ろ
よわう年
しのハぐり
るぐやそ
てやなど（迎ノ）
きすぢあぐ
そぬ（我ノ）
ぬんとそ
ぐんとそ
顧

朱雀院の行幸ぬもるべくしうのりたすぢあ〳〵も

釈 兵衛佐なども、父君そこのり〳〵もをとほをとゝ尼君の方ゝおもひてよもすがら〳〵おひもちぬへまゝ尼君と同じ〳〵うとくおがまんとぞ尼ちいさこゝろぢうつくしうもあるまゝ

玉 源ろぢうふ今ようぢめてなれどもうるさくがらまして

釈 いとゞもく顔〳〵

評 さう八用ありとて指さふ人もなどとう風吹きそこきりもれるそいとをう〳〵もあの尼君の手さきひやべ〳〵かまじめてとれ久さうもう〳〵ことうつゝいとおびくうのひうふ

玉 兵衛を召とよ八上よりとれはさうもおう〳〵かりぬべ尼よろこといひてまの上加さまよろこぶうざう〳〵くおびのうふ八ぢ尼君のまゝ

釈 はゝ尼君をあの姉が門をおりれるさまのまゝでをかしかりうふあ〳〵〳〵で参〳〵う手のまゝのひあも姉が門八まぎれぬもひ出〳〵れて行るぢ〳〵とうのさまのこまうひ出まの〳〵こちてまの八〳〵〳〵たどう〳〵さをいふ指さふ尼をまようあうみうとうるハうろし

ふさうり

釈 おうとて今ひとりをきつゞう

丙 そこのうハちと上あるふくちりふたうふ女こ〳〵もとうう〳〵

新 まのまの尼の隅おてもうくバそうあ尼ぬそのこぢ〳〵ハちそるぐもあ〳〵ハ参まろいまのどひても姉が門をバちようちあやとまぐ尼とぢ〳〵とを会世てうあり

拾 まのまぐきとハまの物をろぐそくもせぬす姫のぢ〳〵あれバいまてまぐ尼とハ万あふ前垣とあさもまへのうぢ〳〵ハ

つまかむすび

まもりぬ。いみぢうもきりもてまつるまをも
ヒト、ホリ十ラヌ
まぢおるくものまよまおもいとゝろうれきてまよ
繋想
こゝのはさこゝもをう〳〵かりぬべ尼よさぢ〳〵
サビシウ
ニトタラズ
ふ(丁)カヘリ玉ラ
うひおとゝんぴとゝものびくうようひのふ
ニアリ
そ後のみちおりうるをおぢ〳〵いでく。門
(異家)
すぎぐるひ(ハ)ぬ(ヘ)どやつてる人あ。ひな
敲
うもつ〳〵ようせう
(ハ中)
くく。ぢ八ぬもふ(ハ)ヨキ
(ハ)
をあ〳〵ひ〳〵ふ参〳〵ふのまよひよもひ
イバろチレ
うたいもがめどるる。とふ〳〵うバろ
二返
イひ
ようよりぢみ〳〵くるもぼう
キノキ、タリゲナ
下
仕
く。

まもりぬ。いみぢうもきりもてまつるまをも
イき
そのはさこゝもをう〳〵かりぬべ尼よさぢ〳〵
(ハ中)
てゐりぬ又人もいでくく。門
イも
あるまでど。ぬもふ(ハ)ヨキ
(ハ)
こゝのそまよひよもひ
帰
すぎぐるひ(ハ)ぬ(ヘ)どやつてる人あ。ひな
フツガフ二テ 二條院ヘ
うもつ〳〵ようせう
紫
くく。ぢ八ぬもふ(ハ)ヨキ
(ハ)
をいぢ〳〵ようよりぢみ〳〵くるもぼう
咲
ひとりをこゝ
独
とのごゐりおとく。又やりのまよ。かゝ尼き
ツウレイ
こゝのそまよひよもひ
繪
すさびおとゝんぴとゝものびくうようひのふ
今日
アンジ
そ後のみちおりうるをおぢ〳〵いでく。門
父宮
紫ノ方
すぎぐるひ(ハ)ぬ(ヘ)どやつてる人あ。ひな
マタ一タン
うもつ〳〵ようせう
近年来

後撰集よいうちにつきぞする
秋のおれそのとをどのさうべやハ
うくもあさけなるまで
釈かくいひつゞけたるよりくもも情あるをでゆめゆめバそうくてといふさて
たゞのごとりおれて 玉 くぐおれ
まつことをかくいふおれおりのごとり
てまつるおれのまゝくおれまさおれ
ちるといふもくぐちるさまなる時
かくべきことのいも 細 帚の返
おのうへおれそうとそうとあり
さて出べき消もあれとと
すさびみやづかへ 釈 事をそ
おれてくおれくあるをすさびと
いふうへおれそうみおれそうめをそ
をうけ 新 鈴の緒
かけこそおれくも
釈 くれくもとうへハ源氏ゑのみ
やうのふ日ぐとおさおそのの
日さうへる庵さをおめる辞
あおの下をおれべうもあべ
風 野をべきやうふことべくき

ちべのぼれ出ぬおもあべとの
さまうへ 釈 この出ぬより 泊
月ふ父のめのかるまバはきべき
ゐもあべとあくにいつるうちも
かのやううぐ 釈 よ紀人のう紀
物ハ出ある月あり出べくく源氏
ゑん筆ちねおべのハこふのうぐ
いへるなく
けそハいとうそ 釈 いう紀ゑ
おいせてハ出ゑめのいとうれさを
べべくくいひゑさる様ゑの
おれをいうくさのふくのべ
あべくくさべるよべく人よ
玉 上のうごゐもハ物をくをと
いふへうりてとごゐもうくと
いひくをべさてこの様おさそ
あべくくさべるおれおおべ
ゐるよおうそべうくさる時く
ハうこへも御うそゑおし日と
年ごゐもいひくゐるゑとの
くゐうさく
ゑおし 新 こゐよへもうて
今あれこうゐもゑ別くのへと
のゐいをとこされご次の司も

よゑべいうりぴもあつくちぎはそだ
ヤマヒガチニ イカクナミ 年フケ
ゐうへるへふぴそひゐくへふよわ時くうこん
ちうこゐひくべ 雑母ノ北方ヘ もんおこあしを。
キニ 陳
かくゐをうゑ おゐんも。んべゐう。
ヨセツ
あべのおへバなふうハゑぼそくともゑべる
キハドノナ チトノヘ
かてお
コアマデ
ちゐんよ。わくせゐちんそよくハ待べ
ヲ会宮ノ
きまとゑやぴよるゐこひせん待ゑよそる
尼君ヲ チヨト
ゑべとそべふいとうう
イカサヘ イヤヒナシ
ゑおもきくめべとそべふいとうう
美
おもやをゐへ
面 痩
貴
○えむくさ記

うけてんをこべをもろこんをしのみ
つのぐましま母おものづくもち
びつづをとるまでをこめてみ
るあーん

あゝ〜うつくしみのひくく〜

釈 ちご子を母のうまとうとう
ゆふかよ他母もんおくゝうう
しをかゝくふ尼君うせうひて
せんぞをさ対ふこわるそで
他母のくいでおーんときづくり
そひのうよう〜

まさてお(の)ん 新 お納(ま)ごかお
ハかくおもまさせそよをぞよ
他へぐふおーをんとおひてる
あるべー

そうあにおもきうめくぞとて

玉 はゝ〜ハろ〜しおのくおのや
きろられれとそぶいとろ〜のさ〜
そひなへのひそ 釈 そろくそひ
へまうをとおぐさのうふく

あぐうも 釈 あのろ〜せのひ〜
飯(ぎり)ぼ参〜てあぐさみぐられ〜
ゆくさんのろ〜 派 世のの兵衛を
あるてうり 評 派の派をもあに

人のみあごとあろくるさ母を
いとよくおとられうおよもの
ほもちぐろくろちて
ろちぐあるてをろあう

釈 尼君ろとぐをあうてをろく
ゆまうろてあひ〜
あにあろう 釈 あてうとふく
乳母もろくもとうをこをふくめ
ろうあう

ふうくべきを 派 ほの惟光て
仰つ八されろ角
ろぐろあく 釈 世之のれ衆じ
らまてくおからあぐうれてこ
ろのあく 釈 すおうち惟光ぐじ
ろふまろても 玉 うろめ
ゆてもとうそんぐと四ほふこて
へほの君あろうをふ〜ろよ
ろてもとひるハぐろうかくよ
詞の衛をおうさほくろあるく
ここはいあ〜ぐ

釈 ちご子めよ 盃 おのそでめふ
妻あぐふなりて八兵衛その(の)はし
めてはろくをは彩権きべたとこ
釈 さいやうに妻あぐいのぐさ様八

○えむ〜さ

ゆくろんそろ
カヘツテ
今いはせふあ
まてば。おぐろ
(ハルツヨリガホセ)
かゝ〜をまふ
帰
まくだ。ふもう
なくわ(ゐ)ふ(ん)
草 入
ろぐ〜ろ
ス
もなぐさめ
慰
の方れお〜ん
まぐろ〜で
年 来 尼君ニ
まつもあ
ツキモッレ ナ
ひくいまをあたくあり
七

ふひよそろ。とおびらぐいみぐたよ。をき
あさはろれ(ゐ)ちもあれど。むまよつとねるぐあて。
(コトヨ) 胸 塞
いのやうふもおそびろびぴるハさてもひ
デモ
いろぐうく 屈
クツタノシ
ろくんとなぐさんろびくぬともな
月日ヲ 乳母
きたつち。 源氏 君のちのとよろハ惟光をさ
原詞惟光伝
てまつまろ。 参 来 禁中
そくあれば。ちごを。
召
もちづくいなくそ。そのねぐなれろつち。
お納(ま)ごの事 直宿
あぢたあろ
(王参ラ又)
グアヒノワルイコト
もろくも。ろる。まぐれ。
カリメ

あしねどゆふされいうある幸もあるべき人をおぐらの山のこのはのごとくおちちりうせてよあはりするをおもふにあまりてかくはよめるなるべし

あるふるこころ　万　世をおもふにまへくおのれの心のごとくもあらぬ俗の中をいとひ山のおくにかくれすむ人などのよめるなるべし

そきたをばねも　玉　それとハ今のよのふるきの類をさしていふ（ママ）ありてそのうち　釈　ありへてハ在（ママ）て月日をへて世と成人のかはりて後ハさるべきおほのがまゝにうくおほへとありあるべきもあんとなるべし

やびおるこころ　釈　わびおきてことをおやうもなくうちでやれるのよハいうおほしもなき人をさしていふなるべし

うーらやそう　湖　さやふらひろめうらへうへとうらをさうく　釈　世ちうとをもときおくりてなんおよくおとろかうづけよとのさとし

○えもむろさね

そぐるよろハそ　釈　浩脈点のごとくかゝる体をさしていふなるべし

ごともぐるよろハそ　釈　ごともぐるよろハそとハ父母のうへさまをさしていふなるべし

うーらやそう　湖　さやふらひろめうらへうへとうらをさうく　釈　世ちうとをもときおくりてなんおよくおとろかうづけよとのさとし

みぐるよろハそ　釈　浩脈点のごとくかゝる体をさしていふなるべし

ごともぐるよろハそとハ父母のうへさまをさしていふなるべし

うーらやそう　湖　さやふらひろめうらへうへとうらをさうく　釈　世ちうとをもときおくりてなんおよくおとろかうづけよとのさとし

はんなることあるべきやよ　湖　お納をがくるあふいそでほのはやとまり婦のなもあるとやとんとあいあるまじきをまもるべきことにしくいそざろーん

ふいもろ〳〵　盂　めのとぐるあまどかいふねおうるもとのも学びおはりつるぶいうを惟光ゐ法がくるあの手くゐひ作るあるて　岷　惟光ろうあるてこあるうあとをおりうにはむくとと　釈　サ納てをおくの惟光ふうるべ必ーも源氏君への作法てのとをえびに旧注ハいうぐくはやをもむく小人ゆゆくせのうんとうおうの

みぐるよろハそ　釈　浩脈点のごとくかゝる体をさしていふなるべし

ごともぐるよろハそとハ父母のうへさまをさしていふなるべし

うーらやそう　湖　さやふらひろめうらへうへとうらをさうく　釈　世ちうとをもときおくりてなんおよくおとろかうづけよとのさとし

はんなることあるべきやよ　湖　お納をがくるあふいそでほのはやとまり婦のなもあるとやとんとあいあるまじきをまもるべきことにしくいそざろーん

ふいもろ〳〵　盂　めのとぐるあまどかいふねおうるもとのも学びおはりつるぶいうを惟光ゐ法がくるあの手くゐひ作るあるて　岷　惟光ろうあるてこあるうあとをおりうにはむくとと　釈　サ納てをおくの惟光ふうるべ必ーも源氏君への作法てのとをえびに旧注ハいうぐくはやをもむく小人ゆゆくせのうんとうおうの

しまはせるなく
とらこの 【岷】とらこの蓬生
あまてらるあがらさんが別まん
もあどろをとしたんをおりしろく
おふせうらし 【釈】かまいあんを
をあすらく離ま枯をら侍る
蓬の縁
をさしあへしらはだ 【釈】あまうり
惟光をもあ人たしそびておめひなど
して出さうるなをするさるさ
大殿ふおそうしるるよ
【釈】葵上の方へ此時ふ已うてせ給
つるとかとより居のひさるふハお
らびぞて女君の対面しありぬ故
よ和琴を川すさびありて
あづまをすがりなく
【釈】あづまと八和琴のるべく
【新】安筝よすらうた八雙の字をとすず
といふ片撥てふま對へてもちらく
上雙六をとまぐらくといる例をも
みるべし
ひさちよ八らをとてつく王
【国】風俗常陸かの比太知仁波太乎
已曽川久礼安太巳々呂可奴止也

ひとめくるこそ人かやとかききらん。あどつ
まし々きバ。ちでむかへてんとおもわれし文
ハ其もびくなまこのふ。くるれバまんのみつふ
をぞへてまつれすふ帖をるをすどものありて。
えまゐるかこねをおちるはやあどけり。ぶ
よかりてぬそらにはむかへよこのたりせうら
つまでぞ。もあもろくしくあんどしばの
よあぎをふをうまちんをさはがふもおぞう。
さぬしふんくもおもひみまてどことずく
あよいひく。ぞをくけへしらもびおねひ
いとなせうまちひるどもるれバ。そるかぬ。

キミガヤヲコエノヲコエア
支見加山乎巳衣乃乎巳衣安
末与支末世留こそ八常陸なる
女のとふれ出あどよう逢ひ来
る男ふよみけるふてあれ
さ八家八男を代ふて飛き
代るす八あれよかし君がききまね
てあそびなうと話ひやしのあらん
あふあづんありて他男をとるる
みな山をとくらてかへる西坂ふ東
まそるとよめるくさて今源氏君
のうるひす八家八此葵の上の
田をよてつくりてよめるごとく
あづん八あれよあづんおりとお
おもてすや蓬生のとみありも對面
しかりぬとよといふさまてく
はふ末摘花のるとあるハいと拙
どかくこうふよりあらさてこと
をさるあれ人をぬすみこく
【国】のそふさらて隠ふむらへ
おさこハぬす出さうとよの人ふ
いうるべしさバうこへやさぬ
されみとくゑく
東のさらぞくさるがる
【湖師】名ふ大殿へ御用の車れさう

君ん大殿よおちしてるたまいの女君。
とみよもきいめん志ゐちびかのむつりう
おびしかひくあづま琴出むろへて乱ちち
よは奥をこてつく王。といふ字をでヲハいと
ふまめきてせせびゐるつかあわられバ。
めしよせくいひまさ月とひのふちろく
あんどやあれぞくちをつうおがりてかの文
ふもろわあバ。わざとむかへいでんもすき
ずきしるべしたさあたんをぬすみいで
すとりとかどたみひあんそのさたよきぞし
人にもくちぐちめてぶうしてんとおぶして。

詞 あるつきかうふねを八車のさうそく（裝束）
暁（更）（紫ノ方ヘ）（隨身）（一人）（二人）（今）
ソノマヽ
ゐてちずゐんひとりふたりおとせれ
いくよせう。ゆくえありてさてたがもうたやう
（ウハキラシイ）
女のむうねんさうよ。（イヒヲヨシ）（通）（牛ノホド デモ）（今カナ）
ハ。ドノのたまひもの。父うへの（推考）きつ称ぞ
（ツウレイ）
とおぼゐみぞれどもてさづゐてんも。
（フツガフニ ソコツ）（トリハヅシ）
（ヨンドコロナシ）
（ガンネンナ）
ゐてふ。女ぢうのまうのちぶくふ。んもとみぞ
（葵上）

（添行）
おゐふうくよいとをちふんるべたるの
（ヨンドコロナシ）
待るをゐひきへいでくゐんちくちゐおり
（おキニ）
きなん。ざわそうぬ（女房ナド）（直衣）
ざわそうぬ。我はるまでぼゐり
（令敲）
なる。惟光バくもちせの人バくもちぬゐの
門（開）
うぐるまをやをそうひきいれゐせ
（ロリト）
く。（惟光下）（妻戸）（鳴）
お網（コレニツヽ）
（惟光）（お網ゐ）
（喚）（惟光）
（イハバちナレ）
おそーゐてあんなどらいとようぱくち

系ゆくそうそて 孟 右度のくちぞて
ゐの作体あり
惟光ぞうを 潮 みびのうさなく
ゐもゐぬのの
孟 ゐのゐのゐもゐぬゐのゐのゐを
ゐれば車をゐらるく
歌 ゐもゐぬゐのあげくるゐふ
車をひなれ引入させて惟光を
づく妻戸をゐてまゐぶく時
ゐ氏君とゐ〳〵ゐすゐ君さく
くふゐなくゐまゐとゐ 秋 ゐ氏君
のゐ氏ゐおをれとゐ
ものくちうとゐひくうふ
潮 いづくうぞのゐおろうまべ
しとおゐてハやうく
ゐんちくせ我べうふ氏
秋 父君のゐへさくせのみをゆて
ゐさ氏よ一云いハおくべきゐゐて
ゐおとうとのゐふく
いうまそうぐくさく
玉 いうゐさぞとゐみさ三少てぞて
そうぐくさ氏ゐさてゐふきたた
ゐゐさくいゐ打ちひてゐる
ゐそゐるべしいうふをいうぞうと

いでさせ給へるとものゝたよりと思ひていふ。宮へわたらせ給ふべかなるを。そのさきにきこえおかんとてなんとのたまへば。なにごとにか侍らん。いかにはかばかしき御いらへきこえさせ給はんとてうちわらひてゐたり。君いり給へばいとかたはらいたく。うちとけてあやしきふる人どものはべるにときこえさす。まだおどろい給はじな。いで御めさましきこえん。かゝるあさぎりをしらでは。ぬるものかとて入給へば。やともえきこえず。君はなに心もなくね給へるを。いだきおどろかし

給ふにおどろきて宮の御むかへにおはしたると。ねおびれておぼしたり。御ぐしかきつくろひなどし給ひて。いざ給へ。宮の御つかひにてまゐりきつるぞとのたまふに。あらざりけりとあきれて。おそろしと思ひたれば。あな心う。まろもおなじ人ぞとて。かきいだきて出給へば。大輔少納言などこはいかにときこゆ。こゝにはつねにもえまゐらぬがおぼつかなければ。心やすき所にときこえしを。心うくわたり給ふべかなれば。ましてきこえがたかるべければ。人ひとり

よー後おもへバさ〳〵
湖師 源氏の御てが河ばかりもいま
ゐらばよー世の供よバ〳〵ありとも
まゐれとそばを車ふのせ
ゐあるも 註 車さゐあるて
商売も多く出るのさ海あげ
ようとうくるまれとうとのべし
よべぬひーはてごもさ〳〵
湖師 上よおぬひいとふむけそひ
あるりればとまのちーそ尾〳〵
評 かくおとさにねゆふよべぬひ
〳〵といひづ〳〵もよつーもこ衣
ゐろへてとろくるともくさまさ〳〵
あにまとのべー
ひまさげて 王 指をふ指吹日
起ふずぐ〳〵げ御ひまさげあと
あく提の子よてくぐえて指と
ゆるぐごと〳〵
うーのろのよ 釈 院の西の方ふ
る對のをあう對八母屋ふ對て
建さるをいよ
ゐろまんをバろ〳〵 釈 上ゆくさ
いづ記て出のべとあろー首尾
やをもへバ 釈 車ろうありまて

まゐ〳〵まさよう。との給へバ。ゐふぜん
〳〵そふ 河
そのゆ〳〵をいとびんなくなん待べ尼。
やー〳〵む。おのづ 然
ーまさば。ごま 間
そひやゐ記おごのことに待まべさぶふ
人〳〵くる〳〵う待るべー。とゆゆれバ。侍
のちふも人をさ世給へバ。ゐふぜん
よをさ世給へバ。ゐふぜん
思ひあ〳〵ゆ。あやーとおゆく
ーてゐいのふ出ふ給てとでゆせんうまを
泣

まゐパよべぬひー 前夜
こづ〳〵もよ 雖
二條院ちう
ほごにおちう
よせておりゆ
ゐにいぶきて 抱
妻のこもし
ようよそやと
ばう〳〵いゆさ
あーべおて 送
なくておう
ナクテ 金事

やをらゐさやをそ〳〵六隣踏も
ろしお納そうさゐろうぐごし
そバむおなり 釈 禁よゐもく
ゐふこそのこちー待をと
いふこそのこてそれいろうと
のこゆへてそれいろうと
やうゐあるバさぐうそのくバ
泊よんでよゐバ
泊〳〵づ〳〵バそ〳〵 釈 お納そ
の車よりゆ〳〵ゆるとんおひ
てはのは男をバゆくろ〳〵しゆう
くれバそをおいえ〳〵んとゆーバ
ゆきよおて〳〵せんとのさまを
おろうの御そまて一つのことと
〳〵そいへる後ぐ
ゐろうろて 釈 お納そろゐ
とおでとせんうろて車ろうあう
ゆとろにおさまー〳〵う
釈 後ゐよ西さんそむおさろだ
もるろ〳〵餓ろ〳〵いるめぞ〳〵
そてもうくてもそ〳〵
秋 うおさをそひこおさを御ひ
つひよいみろごとゆうをを
跡きろる女の公画るぐごし

もまづうあ〳〵ぴやのおりーのこまりんこと。
靜
いふおろそ
成
竟
てもかくてふべたばひわさはおろと
（今ラ）
てもひやうあれりきんくよおろこと
（イヤ九十七）
後
母君尼君ナド
やしまくるういみじさとろろよ後のそぐ
（今カナシクテ）
忌々
よりぬをさひぐよゆくきれぞ。ねんじ
コラヘ
西ノ對
對
源
住
ぴうるこはそみのろぬたいおまバ。
ソコラアタリ
コレラヘタテ
惟光朝臣
惟光
引
下
御
座
おまつぞひきつこはふぞろうそ
東
對
ぴんぐれぬいよぴさとのおれ
衣ノ類ヘ

めくよたろもてぴおりぬぴそ君イカ
いとむつ
キミワルク
そまるくぐさまろぴうよまてるすおんぴとろ
櫻
おバぐ納言ぐめてこまくよねんとのろ
トコロ
泣
戰
いとめりぬ。ふろたさバおろそのごろぬをばじ
幼
モハヤサウハ
まぐぐよ。ぴとをへやまへバぴうとびくて
數
フラクテ
なたあくぬぴおろぬぴもろもおされぐ。
乳母
ネラレズ
おをおおぐくぐさてるたおるうぴおけやくまく
明
よみろるをぐぬぴおろぐれたろぐぬぴ。
大殿
造
ひぐよ。ぴろぐものもいそぴぴ。夜のそれぐぬも。
飾
イフニモオヨバズ
御
まをろまんやろんこてぐやく
權
栗

お納そこ納うまうおれのものぐ
とをふんのこ
あろもこもりにれらさせバ
潮
おまもぐぐろうあぬおぐふ
おもぐぬあそんこ
夜のまおぐも
評
ぴて一句おて
二条院のいぐをきそろう
いこおそふ
そくろおうひぬれぐ
お納
ろうおうのおまて交らえんハネ
おぐ合ふこうおれぐ女房
るぐバ仲ぐのぐ男ぐう雀ぢ
和おあるをもてぴのあぐをる
うこれまろうごおぐめ
女房のぢうぬをそろえ
ちのおくふハ
此男のおそうのにけるを
きこふふとろそこ
ふれあん
誠ふんぐぐる女ハ
ぐバぢおぐろのふんあぐ
ぴぬぐ
ぴぢ
二条の院のおよおハおぐ集

さらく 圖和名抄唐韻云饘和名加太賀由厚粥也とあるて今のかゆ也 人の飯を粥となる云ふ也 今の食きる飯を云也 飯とハ蒸たる也まてむしたるを云 さるべき人く 細おもての人をめしと 哢身づけてハ名条 つかてのさまとひらハ人のめを嗜り ゑふとおかべし
ちひされらぎらてとさらにゑてもさぎてかきさまにざれどいふと 国てとさらふハ俗かのようなる
君へ流るれよまとてまそく 釈源氏の源氏ゑの中宮の流されく ふりまくるかゑるへし
かうへからくみおもてを 釈上よみおもふりのへうとゆれバ 粉うらろけむと云つてみのみふる だらし方おかくくみ知なるせてと の名あへるし
さぎうるなみ人ハ 釈ぶ谷源氏じまうき らるもしられど常よ人ハ源氏君 おのごし来すぐるあまる人おまくばらう むら人出でてんなを流くさんやとりふ ゑかとろしるべし

こちまするふぢしきぶくもひおられど。すあまふよハ女房(イ女あるじ)ともさぶらへばかりけり。うとにまゐらうどおどろかるるをのゝの(西ノ對)(侍 イのナレ)(客)(踈)りうおりぞれだ。をとこどめてみまうみとれ(人)(男子)みぞるるかくへむく人まつりどやのきさらくハ。(簾外 イおのおとし)(内ノ乗)忠それなしん。おかろげよわあしとさらめく。(ヒトヘホリ)(サ、ヤク)流てうづはらるのどこるふかみおる。日出を(手水)(粥)(イ井ラス)うらわきさひとくなくてあらぬるを。(高)(起)侍るなさくへ夕だそてまてハむらへさせ(附)給ちめとのほひくなつよきりもへし(然)(東ノ對)(童女)(召)まつらちはちひきれらぎこことさきれ(少)(バカリ)(ベツダンニ)

今よりきゝしへ中宮のよ 湖おほもんのまへに於けりとて 見たやとあるおれとかきまさ いろひきのゝそうおやさるとも いとよくそへてとおどれとて 流るさちハ 国これハ上下の 云のつぎさざ源源氏君のゆれる ちを以てかうふおも中すべらう 国補下への詞つぎきのさまよ誠よ 源氏君のほうちちは以てるやう まゆるれどこれハ必中の上にれ ゆるちをいふべきのさされバ きよむまての下に着する詞 おぢあるべし 釈此二説皆非 よらん無ぞうりまでかくあら らせてハ源氏君の流るちもとん んより却ハ方それバ皆く宜から きらさぐるべしや 釈とりしき給 玉給の脈 ゑんするおひるきの 国かのぞを 上へつけて見る説ハひがごとさて ハおとうきとるのゝの 河ぶや上外祖母の後をゑゆまる ひんぐしのよのよ 細源の氏れ

まゐきとあわられバいとたうげまて(ウツクシゲ)見人へ参りくる君をたはてよまどゝれく(衣)(紫)なまつるを。さるへくおとしてかくんちら(イ ま)(シヒテ)(起)(ツラ)くあおかるゝ世にうよぶくおるへハうかゝを(ク)(ムサトシタル)(加此)なんや女ハんやらしうちあるなんよきあるど。(柔)(和)今よりそへしつゝのふなるさちハよ(ハヤカラ)(源ノ)させきくゑらくよりとゝみぞうきてら(近クテハ)(浄)まてなりうつおゝしへひつかそう花(紫二)給。あそびぬどん。とあまにほらしてゑんぎ(取)なまつなむまつくだきまどもちりのふ(其)やらくおへにいそくとんのふびゝろおの心は(ソロク)(イカソ)(鈍)(ウツク)

さしすぐしたるんぞせの

【釈】お納ちがさしたるんの作りに思ふを父ゆのうへ見たさんを作りしなど尋ねるよハいらだして心まうせてみてゆゑしかんとありおのうるハいそでへりるさえおのうふ見たさんとゆさまてハ逢りしゆ出なりしバ云く

【釈】漢月ふこれを兵部卿ゆの里れ宮ふつげ出なりふ詞として見づくしくとゆを語ふおまるくのんとゆへるハまことふさることおまでさてハ見づくもしくとあるぐがし切ぎしてこぶまる事なりしかまこまふこまハゆのはんよてもしゆ出なしバ告よと里のくゆのさまふも見づくりしくてさもえのさまりぬ主なもそぐ相様なりしバ志げしく漢月の名としてりよぐがしを削りつりてハ思べしあとさりなくて

【玉】僧都のかとへ行ひなりしてもさしよゆへ志らまらぬよしく

小方も母君をしく

【釈】兵部卿

よ。ゆもいふひなうおげして。こあまぐんも。故
かしこよ見るりのけんまをいとゆのしと
宮 〈紫〉
おげしたゆことなまバ。ゆんのとれいとさし
イカヾシイ デノ
すぐしたるんぞせの。ゆまりゆ。おいしうけ。
スギタ キマヘ ジンジヤウニ
わゆさんをびんなしなどハいたで。ゆよまら
〈宮〉 フツガフナ 〈合方〉
きく。ゆてちぶしつるなゆりとなく
率 放流 ノトミエル
かゆりおひぬ。りしきし出なしバつげよと
告
のまふも見づくりし。〔く〕僧都のはりとゆを
コムヅカシ
ゆくゆしゆしゆへど。あとさられくて。あたらし
可惜
うゆしはうちなど。忘しくうなしとおぼ
容貌
せ。小のうちも。母君をよしと思ひゆゑ給
宮ノ北方ヘ 紫上ノ母君ヘ

ゆの小方も紫上の母君をよしと思ひゆゑ。いもへうけうせく紫上をバ見ゆゑまうせておしたてんと御ゆゑ事をしくおゆしとく

やうく人ゆりあつまりぬ

【細】是より文二条院のすゆり

【釈】集りあつまるハなんよりも年ゆよりも年ゆあるべしなんよりとゆうぎりたる御ハ見ゆ御ゆゑ御のまゆべちごどもを思うちとゆんべし上ハ人とあれバ年ゆふみゆくまりたりとゆべし

かとよりゆあるひゆしゆりで

【釈】これハ父ゆをバ御ふ思ひいでゆしゆりぬゆをことゆる文ヘ甲乙の思れでとくんなべしゆと八日ゆまておひたゆへまバ御ふ思ひ出ゆりぬとく

のちれおやをと

【釈】源氏君なることに御ゆし上ふかのさまひふかんはりたりふおげしおいてんやとゆし孫を思ひしてゆゑの祝とゆる

ひたるんとうせく。我んよまうせまひつ
失
ゆうおりけしたるに。まちぶひぬるハ。ゆちち
ザン
をしうおげしたまり。やうく人まゆり
ネンニ 次第〳〵ニ
ゆつまりぬ。はあそびゆうれのまちたべ
集 アヒテ 童女
ちごども。いとめづらしいまゆりれ。御
小児 タウセイフウナ 〈源紫〉
ありさまどもなれバ。ゆゑとなくてあそび
ゆへり。君ゆ男君のおもせぎてなどして。
紫
さぐくしきゆぐれなどだりぞ君ゆを
モノサビシイ
こひゆゑ給ひく。うちなれなどしまへど。
恋
〔乙〕父君 ゆをバこれ殊にゆひ出ゆゑまりバ。とゆ
よりみるしひゆしまもで。なしひまへまバ。
ミナレ ナレ

〇若むらさき

いつそうの
おとうみそうれバ　湖　源氏かう
くちうえさそ
さるうさこの八　釈　ほるうさとハも
てあそびのうへのみ方やうさき
あり氏次ようハさるうふらうう
きようをあしく述うえ
さうらんおうとうく
湖師　さうらんハ嫉妬ねどめうさ
をいふて男のひをひよくもうしみぢちとハ女をいふ
あり　釈　年ごろてまくらおく
夫婦とあしくふかりさうらんん
あうてむつうきすぢふねさ
あどもハんおもさがるもの出
来やうんとうもかうべしさう
バ女がうも恨こぢちよありく
事外のこもの名ぬとそこん
をいふなどさうもあるまバ
をうき我びおもとつさるる
ぞ
むすめどうさ　釈　さうの娘
あどハうなの年ごろふるまバ
かくんやうそくふるまで情大

今ハ年ごろの海氏やをいみぢうち
びよりそ　纏
出むうひくおうまてよおうまひぱふとうち　懐
よいうるくいぱさうとくさづうとそ　ナツトモ　躁　イハヌ
おもひさぐるとよハいみぢうらう　ソノ方ニハ
さそまとむつうきすぢよおうぬまバつぐ　源
くまとむつうきすぢよおうぬまバつぐ　コメンダウナ
んちもそうこうふぬもいでくやと　出来
こ後おうれ　紫
キカオカレ　イもと
此事もおのづ　自
めてあそびた　息
モテアツカヒ　媒

よなれぬまでぱんやをくうちぬまひ。
隣心
ぬてあさすにおきつをこそいとさ陥かそ
為　様　変
もすまでたを
るかづき
禁止

○五十五

かうともふりぬべくてそうき
さもうまハえもそもでたよこまをそ
つひよ夫婦とあるべきくんれバ
さそうろうろうづきぬとお
むそうろうあり
これハいとさぬうそうろう〳〵
国　こまでハまこのむすめとハさ
まうろうろうづきぬさぞとそ
ほよのやうもあべうくとまぬの
のやうもあべうくとまぬの
事へもうけていろハうろか
づきぬさくんりそうむすめうたくいの詞し夫婦のうれさぬう
お上かいひくこへハからぬ事を　釈　この物語ハこの末をさまくふ体をうへくはぐるこてうゆえひくうと
そ源氏君の世をうつくふ作けくなりうるくぬいひくうと
院よおそうれバむうさんのうえいともうつくうとおひまて
とくまあそ夏ものうる稲をひきすべくぬべうるあり